宮城県文化財調査報告書第97集

御 堂 平 遺 跡

昭 和 58 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

産業・文化の地方分散化とともに、地域構造の流れの変革が進行し、経済の巨大化、画一化の中で、とかく見失われがちであった人間性の回復を求め、地方に定住したいという人が増えてきています。

私達の住んでいる宮城県は、独自の歴史的風土と歴史をもった地域社会を形成しています。地域の自然や文化を知り、郷土愛をはぐくみ、より豊かな地域社会を創造するふるさと教育は「ふるさと造り」運動と相乗効果を生み出しながら県民の血液的な役割を果していると考えられます。

ところが、「教育とは広義における文化財の伝達と創造のための営みである。」と云われ、「教育は人類が長い世代にわたってきずいてきた文化財を若い世代に伝達し、その若い個々の生命に体験させることによって、さらに高い文化をきずいて行く営みである」（学習指導における文化財の手引）という言葉は、自然や文化財に親しみをもって味うと含蓄のある言葉であります。

県は仙台市西南部の高等学校進学希望者等に対応し、教育目標を達成するため鈎取の地に宮城県仙台西高等学校建設を計画しました。ところが予定地に御堂平遺跡の広がりがあることがわかり、学校設立という教育文化財創造と遺跡の保存という大変難かしい問題に直面しました。関係者間で協議し、盛土による遺跡の現状保存と校舎等構造物建設部分について発掘調査による記録保存を図ることになりました。

本報告書はその結果をとりまとめたものであります。学術研究上は勿論のこと社会教育の資料として広く活用され、文化財に対する理解が一層深かめられるよう願うものであります。

最後に、本報告書を刊行するに当たり卸協力をいただいた関係者の方々に深く感謝を申しあげます。

昭和58年3月

宮城県教育委員会

教育長　三　浦　　徹

例　　言

1. 本書は、宮城県仙台西高等学校建設に伴う御堂平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査の主体者は宮城県教育委員会である。
3. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
4. 本書における土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を、土性は国際土壌学会の粒径区分を参照した。
5. 本書第1図に使用した地図は、建設省国土地理院発行の1/50,000地形図「仙台西南部」を複製したものである。
6. 整理、報告書の作成は文化財保護課が行い、斎藤吉弘・佐々木和博が担当した。
7. 本遺跡の調査、整理に関する諸記録、出土遺物は、文化財保護課が保管している。

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県仙台市鈎取字御堂平
遺 跡 記 号：ＧＲ（仙台Ｃ－239）
調査主体者：宮城県教育委員会
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 期 間：第1次調査　昭和56年7月13日～8月26日
　　第2次調査　昭和57年3月1日～3月12日
　　第3次調査　昭和57年5月4日～5月14日
調査対象面積：30,000㎡
発 掘 面 積：16,885㎡
調　査　員：平沢英二郎・斉藤吉弘・加藤道男・真山悟・手塚均・太田昭夫・菊地淳一・佐々木和博・相原淳一・菊地逸夫
調査協力機関：仙台市教育委員会・宮城県農業短期大学

目　　次

Ⅰ．発掘調査の経過 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 2
Ⅲ．調査の成果 6
1．基本層位 7
2．発見された遺構と出土遺物 8
(1) 土器埋設遺構 8
(2) 竪穴住居跡 9
(3) 礎石建物跡 18
(4) 竪穴遺構 22
(5) 土　　壙 24
(6) 焼土遺構 27
(7) 窯　　跡 27
(8) 遺構以外の出土遺物 28
Ⅳ．考　察 31
Ⅴ．まとめ 36

Ⅰ．発掘調査の経過

宮城県教育委員会は、仙台市及び周辺市町の宅地造成に伴う人口急増による高等学校進学希望者増と既設県立高等学校の地域的バランスを考慮して仙台市・泉市・宮城町に各1校、合計3校の新設高等学校建設を昭和58年4月開校を目ざし検討してきた。

しかも、建設予定候補地はそれぞれ60,000㎡以上の面積が必要なうえに都市部あるいは周辺の住宅地に近接した立地条件が要求され、まとまった面積の土地を確保するには必然的に公有地を核とした地域を選定せざるを得ないという制限が加わっていた。

ところが、仙台西高等学校と宮城広瀬高等学校建設予定地には埋蔵文化財包蔵地の所在が確認されたため、昭和56年4月、遺跡の保存をめぐり、学校建設部局と文化財保護課との間で内協議が始められ、関係者が分布調査を実施した。

昭和56年7月9日、6月議会で建設計画が議決された。

仙台西高等学校は校地68,716㎡、生徒数1学年360名の男女共学の学校ということで建設計画がスタートすることになった。

仙台西高等学校の建設予定地内には、縄文・奈良・平安時代の遺物を包蔵する御堂平遺跡の広がりが知られており、遺跡の範囲及び性格把握の調査を実施することになった。

調査は用地内に未買収の民地と国の用地（道路部分）があるため、三次に分けて実施した。

調査区はトラバース杭A11－C11（磁北）を基準に、1辺60m単位の大グリッドで調査区全体を区画し、設定した。さらに、それぞれの大グリッド内に1辺3mの小グリッドを区画し、設定した。グリッド名は東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で示した。

第一次調査

調査は昭和56年7月13日に開始した。実習地の一部・民地・国管理地・道路を除いた校舎（丘陵斜面）とグラウンド（河岸段丘面）の建設予定地など約22,000㎡を調査対象とした。始めにグランド予定地にトレンチを設定し調査を行った。その結果、土壙・焼土遺構などを地山面で確認した。遺構を確認した部分は盛土が厚く、現地表面から遺構確認面までは約80ｃｍ～90ｃｍあった。校舎建設予定地については斜面が全体的に削平されているために、斜面全体の遺構確認を行うことにした。グラウンド予定地については盛土工法により遺構が保存されるため、範囲確認調査だけとした。

8月に入り丘陵部分の調査に入った。その結果、丘陵斜面中央部に南から浅い沢が入り込み、沢の東側と西側は傾斜しながら段丘面に続く斜面であることが判明した。この斜面で確認した遺構は沢の西側で竪穴住居跡1軒、東側で礎石建物跡1棟・竪穴遺構1基・掘立柱柱穴などであり、いずれも地山面で確認した。

第一次調査で確認した遺構は竪穴住居跡1軒・礎石建物跡1棟・竪穴遺構1基・土壙7基・焼土遺構5基・掘立柱柱穴である。

調査は実習地の一部・民地・国管理地部分を残して8月26日に終了した。調査面積は約7,060㎡である。

第二次調査

調査は昭和57年3月2日から開始した。実習地の一部・国管理地・道路など約7,000㎡を調査対象とした。実習地に3本のトレンチを設定し、遺構確認調査を行った。その結果、地山面まで約40ｃｍ～50ｃｍあり、遺構はなかった。国管理地・道路部分については第一次調査で確認した礎石建物跡南半と丘陵斜面西側を調査した。その結果、礎石建物跡は3間×3間であることが判明し、丘陵斜面西側では竪穴住居跡3軒と土器埋設遺構1基を確認した。調査は3月12日に終了した。調査面積は約965㎡である。

第三次調査

調査は昭和57年5月6日から開始した。丘陵斜面西南側の民地約2,000㎡を調査対象とし、そのうち約1,800㎡を調査した。その結果、竪穴遺構1基・土壙4基・焼土遺構1基を確認した。調査は5月14日に終了した。

Ⅱ．遺跡の位置と環境（第１・２図）

本遺跡は仙台市の西南部、長町駅から西へ約4.5ｋｍの仙台市鈎取字御堂平に所在する。

仙台市西南部の地域は西から東へのびてくる青葉山丘陵の東端に位置し、その地域は東と南にのびる樹枝状の丘陵になっている。この丘陵群の東側にはさらに段丘（中町・下町段丘）、沖積平野が広がっている。これらの丘陵群・段丘を開析して、名取川の支流である笊（ざる）川などの小河川が東流している。

この樹枝状にのびる丘陵群の中に、佐保（さほ）山・鈎取（かぎとり）山から紙漉（かみすき）山地区にのびる標高約100m～110mの丘陵と太白山から上野山を経て千本杉地区にのびる標高約80m～90mの丘陵がある。この2つの丘陵は上野山と鈎取山付近で北と南に張り出し、丘陵間が狭くなる。この2つの丘陵間を笊川が東流する。笊川は上野山・鈎取山付近の丘陵の狭くなる部分から上流に谷底平野を、また下流には小規模な河岸段丘を形成する。

御堂平遺跡は前述の丘陵間の狭くなる部分の東側に位置し、紙漉山地区にのびる丘陵の南斜面（標高約50m～60m）とそれに続く笊川左岸の河岸段丘面（標高約48m～50m）に立地する。遺跡の斜面東側と西側には遺跡を包み込むように丘陵の張り出しがみられる。また、この斜面および河岸段丘面には南から浅い沢が入り込み、遺跡を東西にわけている。

番号	遺跡名	7	土手内横穴古墳群	14	鍛冶屋敷A遺跡	21	清田原西遺跡	28	内手遺跡
1	御堂平遺跡	8	北前遺跡	15	西台遺跡	22	清田原東遺跡	29	土手内窯跡
2	上野遺跡	9	北前遺跡	16	鍛冶屋敷B遺跡	23	船渡前遺跡	30	芦ノ口遺跡
3	三神峯遺跡	10	山田上ノ台遺跡	17	六本松遺跡	24	谷地前遺跡	31	後田遺跡
4	金洗沢古墳	11	町遺跡	18	土手内遺跡	25	裏町東遺跡	32	富沢上ノ台遺跡
5	富沢金山窯跡	12	八幡古墳	19	汚田通遺跡	26	山口遺跡	33	富沢清水遺跡
6	裏町古墳	13	富田南西遺跡	20	竹ノ内前遺跡	27	富沢館跡	34	堰ノ内遺跡

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第２図　御堂平遺跡遺構配図

遺跡のある地域は宮城県農業短期大学の実習地となっている。斜面部分を削平と盛土によって、ひな段状にし果樹園として利用している。河岸段丘面にも盛土が行われ、沢付近は水田として、その東側は畑・果樹園として利用している。

本遺跡の周辺には旧石器時代から中世までの数多くの遺跡が分布している。これらの多くは丘陵群の東南側にみられる段丘面と名取川左岸の自然堤防上に立地している。以下、この中で本遺跡と同時代と考えられる縄文時代（中期）・平安時代・中世の遺跡を中心に概観してみたい。

縄文時代中期の遺跡は丘陵・段丘面と自然堤防上に立地している。前者に立地する遺跡に三神峯遺跡（岩渕・佐藤：1980）・山田上ノ台遺跡（渡辺・主浜・柳沢：1981）・北前遺跡（佐藤・斎野：1982）などがあり、後者に立地するものとして清田原東遺跡・清田原西遺跡（宮城県教育庁文化財保護課：1977）・船渡前遺跡（宮城県教育委員会：1977）・山口遺跡（佐藤・吉岡・篠原・結城：1981）などがある。

平安時代の遺跡は最も数が多い。立地は縄文時代中期と同様である。丘陵斜面・段丘面に立地する遺跡には羽黒台遺跡・芦ノロ遺跡などがあり、自然堤防に立地する遺跡には山口遺跡・上野遺跡・六本松遺跡などがある。このほかに窯跡として富沢金山窯跡・土手内窯跡がある。さらに山口遺跡では水田跡が発見されている。

中世では北前館跡と富沢館跡がある。前者は段丘面に、後者は自然堤防上に立地している。

また、本遺跡の東南約1ｋｍには『延喜式』巻10にみえる名取郡多加神社の有力な比定神社である多賀神社がある。さらに本遺跡の南約6ｋｍには名取熊野三社（熊野那智神社・熊野本宮・熊野神宮社）があり、その成立時期は平安末期とされている（伊藤：1980）。

なお、本遺跡の西北約2.5ｋｍに「大仏」、南0.4ｋｍに「紅堂」という小字がある。本遺跡の「御堂平」とともに仏教関係の地名として興味深いものがある。

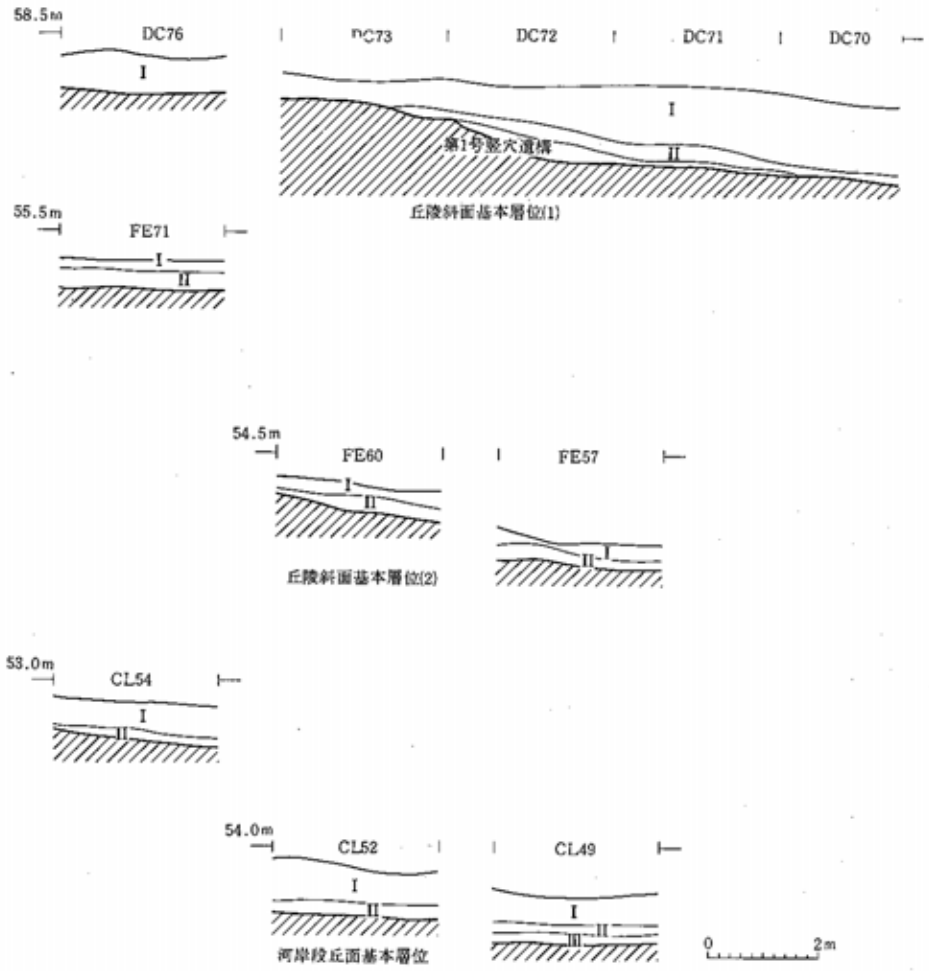
Ⅲ. 調査の成果

調査の結果、沢の西側の斜面では土器埋設遺構・竪穴住居跡・竪穴遺構・土壙・焼土遺構が、沢の東側の斜面では礎石建物跡・竪穴遺構が、また沢の東側の河岸段丘面では土壙・焼土遺構・窯跡が発見された。これらの遺構は礎石建物跡を除き、すべて地山面で確認された。調査ではこのうち、土器埋設遺構1基・竪穴住居跡4軒・礎石建物跡1棟・竪穴遺構2基・土壙4基・焼土遺構1基・窯跡1基を精査した。

1．基本層位（第３図）

丘陵斜面：2層にわかれる。Ⅰ層は盛土で、北側では厚さ約40ｃｍ～50ｃｍ、南側では約100ｃｍ～120ｃｍである。Ⅱ層は旧表土（黒褐色土）で、北側では削平により認められないが、南側では約10ｃｍ～20ｃｍ堆積している。層中から土師器・赤焼土器・須恵器が少量出土している。

河岸段丘：3層にわかれる。Ⅰ層は盛土で、厚さ約50ｃｍ～80ｃｍである。Ⅱ層は黒褐色の二次堆積土である。厚さ約10ｃｍ～30ｃｍで、層中から縄文土器・土師器・赤焼土器・中世陶器が出土している。Ⅲ層は暗褐色の二次堆積土で、窪地に堆積している。厚さは約20ｃｍ～40ｃｍで、層中から縄文土器・土師器・赤焼土器が出土している。



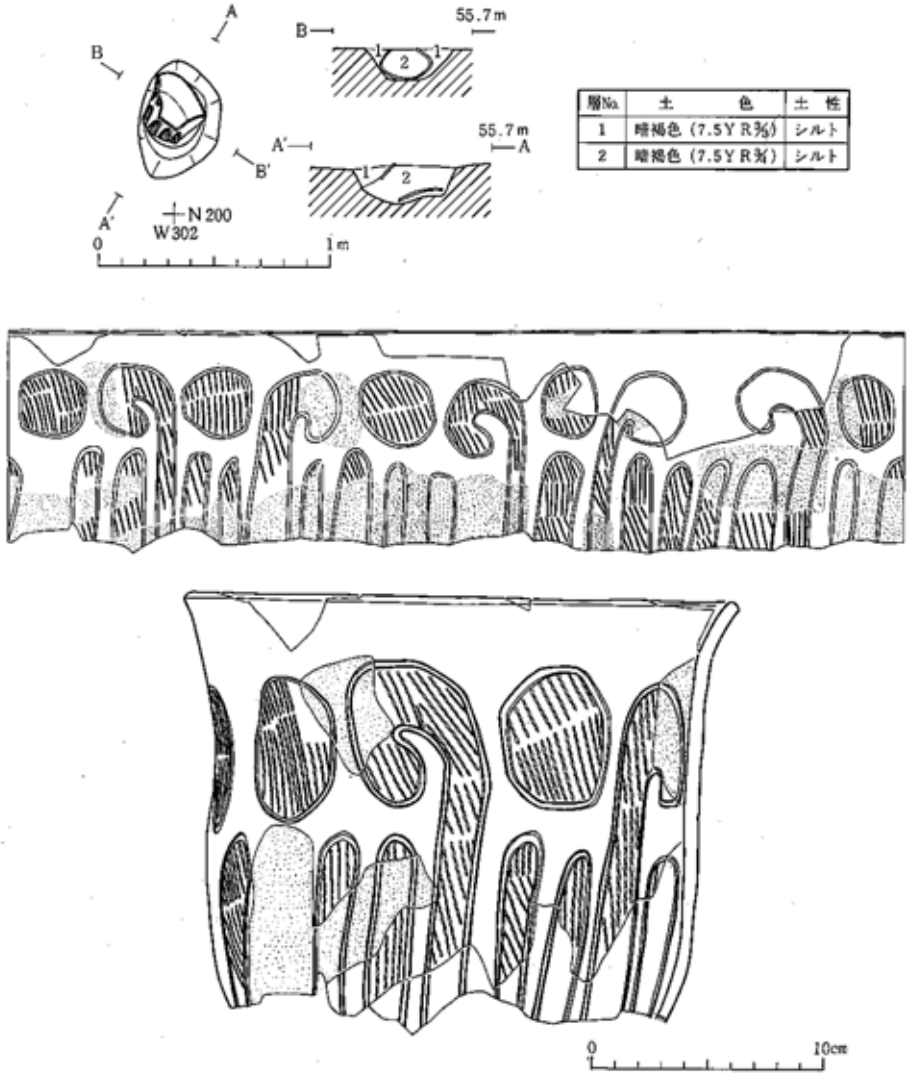
第３図　基　本　層　位

2．発見された遺構と出土遺物

(1) 土器埋設遺構（第４図）

〔平面形・規模〕南北50ｃｍ、東西35ｃｍ、深さ15ｃｍの楕円形を呈するピットである。

〔堆積土〕2層にわかれる。第1層は土器外の、第2層は土器内の堆積土である。



層No.	土　　色	土　性
1	暗褐色（7.5Y R3/3）	シルト
2	暗褐色（7.5Y R3/1）	シルト

第４図　土器埋設遺構と出土土器

〔壁・底面〕　地山を掘り込んでいる。壁は外傾して立ち上る。底面は中央部が凹む。

〔土器出土状態〕　胴部下半を欠損し、横位の状態で出土した。

埋設土器・深鉢（第4図）　口縁は平縁でわずかに外傾し、胴部がわずかに膨む。口縁部から胴部にかけては沈線による縦位楕円文・懸垂文が施文され、文様の内部には地文として撚糸文（L）が充塡され、その後器面全体に研磨が施されている。文様の構成は大きな懸垂文が向い合い、その間に縦位楕円文が描かれ、縦位楕円文の下には「∩」状の懸垂文が2～4個描かれるというものである。

(2) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第5図）

〔平面形・規模〕　3.2～3.4mのほぼ正方形を呈する。

〔堆積土〕　6層にわかれる。第1層は住居跡の中央に、第2層は住居跡のほぼ全域に堆積している。第3～6層は住居跡の壁際に流れ込むように堆積している。

〔壁〕　地山を壁としている。壁の立ち上りは急で、壁高は最も遺存のよい北西隅で約25ｃmである。

〔床面〕　床面の状況は全体にかたくしまっており、南壁と東壁周辺は地山をそのまま床面としているが、他の部分は住居跡の掘り方上面を床面としている。

〔柱穴〕　住居跡の掘り方埋土を取り除いた地山面で2個のピットが確認された。住居跡の北東隅と北西隅に位置するが、柱痕跡が確認されず、柱穴がどうか不明である。

〔周溝〕　北辺・東辺・西辺の3辺にみられる。幅は8ｃm～18ｃmで深さは3ｃm～6ｃmである。

〔カマド〕　住居跡の南西隅で、径約30ｃmの円形状に焼け面が認められた。カマド燃焼部掘り方のみが残存している。なお、燃焼部付近の堆積土中から切り石が出土している。

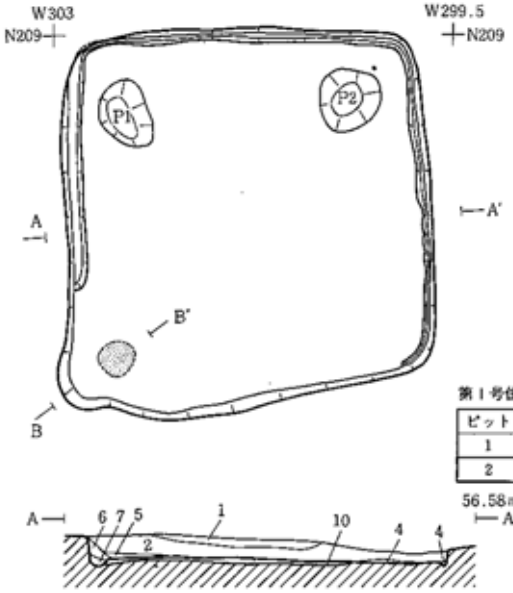
〔出土遺物〕　出土遺物には土師器・赤焼土器・須恵器がある。住居跡に伴うと考えられる遺物には床面・カマド内出土の土器がある。

◦ 住居跡に伴う遺物

土師器

坏（第5図1）　製作にロクロを使用している。体部は内弯気味に外傾し、口縁部はわずかに外反する。外面は体部下端から底部全面に手持ヘラケズリが施されており、底部の切り離し技法は不明である。内面にはヘラミガキと黒色処理がみられる。ヘラミガキの方向は体部が横方向で、底部が一定方向である。

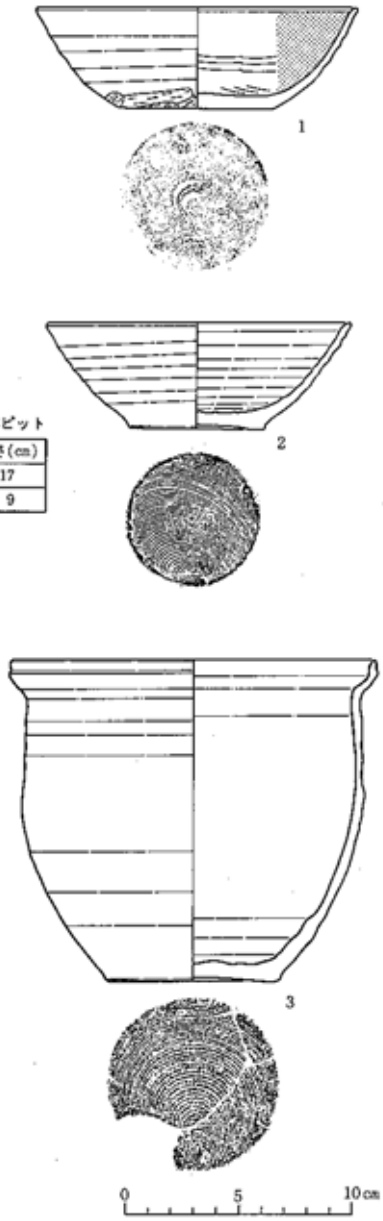
甕（第5図3）　製作にロクロを使用している。体部はやや丸味をもって立ち上り、頸部で屈曲し口縁部は外傾する。さらに口縁端部は短く直立している。内外面ともロクロ調整で、底



第1号住居跡ピット

ピット	深さ(cm)
1	17
2	9

層No.	土色	土性	備考
1	明黄褐色 (2.5Y 7/6)	シルト	
2	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	
3	黒色 (10YR 2/1)	シルト	
4	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	部分的に地山ブロックを含む
5	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	
6	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	暗褐色シルトをブロック状に含む
7	黒色 (10YR 1.7/1)	シルト	地山ブロックを含む
8	赤褐色 (5YR 4/6)	シルト	カマド崩壊土
9	暗褐色 (7.5YR 3/4)	シルト	
10	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	部分的に地山粒含む。掘り方埋土



第1号住居跡出土土器計測表　(単位：cm)

図版番号	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高
第5図1	床	土師器	坏	14.0	6.6	4.5
第5図3	カマド	土師器	甕	16.0	7.7	14.2
第5図2	床	須恵器	坏	13.4	5.9	4.7

第5図　第1号住居跡と出土遺物

部は回転糸切りにより切り離されている。

須恵器・坏（第5図2）　体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部は回転糸切りにより切り離され、再調整は施されない。

赤焼土器　小片のため図示できない。

第2Ａ号住居跡（第6図）

〔重複〕　第2Ｂ号住居跡を切っている。

〔平面図・規模〕　東西約4m。南北規模については攪乱を受けているため不明である。遺存部分の形態から方形を呈するものと推定される。

〔堆積土〕　4層にわかれる。第1層は住居跡中央部に、第2層は住居跡のほぼ全域に、第3・4層は壁際から流れ込むように、それぞれ堆積している。第4層には炭化物が多く含まれている。

〔壁〕　地山を壁としている。壁の立ち上りは急で、壁高は最も遺存のよい北東隅で約30ｃｍを測る。

〔床面〕　第2Ｂ号住居跡と重複していない部分では地山を、重複している部分では第2Ｂ号住居跡の堆積土を、それぞれ床面としている。

〔カマド〕　カマドは北壁中央やや東寄りに付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部側壁は粗割り加工が施された角柱状の凝灰岩で構築し、その外側に暗褐色シルトを積み上げ補強している。支脚も凝灰岩の粗割り角柱で、直径13ｃｍ、深さ12ｃｍのピットに立てられている。支脚の西側燃焼部床面にも角柱状の凝灰岩が置かれ、その上に土師器甕が正位の状態でのっていた。煙道は燃焼部から先端に向って緩やかに登っている。

〔貯蔵穴状ピット〕　カマドの右側にある。約50ｃｍ×約80ｃｍの長方形を呈し、深さは床面から約15ｃｍである。

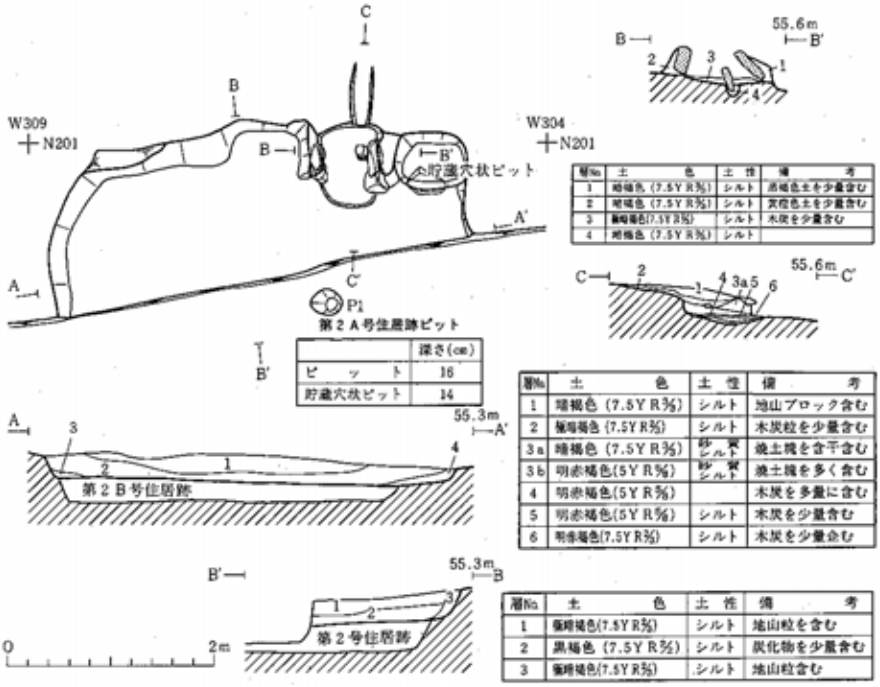
〔出土遺物〕　出土遺物には土師器・赤焼土器・須恵器がある。住居跡に伴うと考えられる遺物には床面・カマド内出土の土器がある。

◦ 住居跡に伴う遺物

土師器

坏（第6図1）　製作にロクロを使用している。体部が内弯気味に外傾し、口縁部に至る。底部は回転糸切りにより切り離され、再調整は施されない。内面にはヘラミガキ・黒色処理がみられる。ヘラミガキは底部から体部中央にかけては放射状、体部中央から口縁部にかけては横方向である。黒色処理は内面全面と外面の口縁部にみられる。

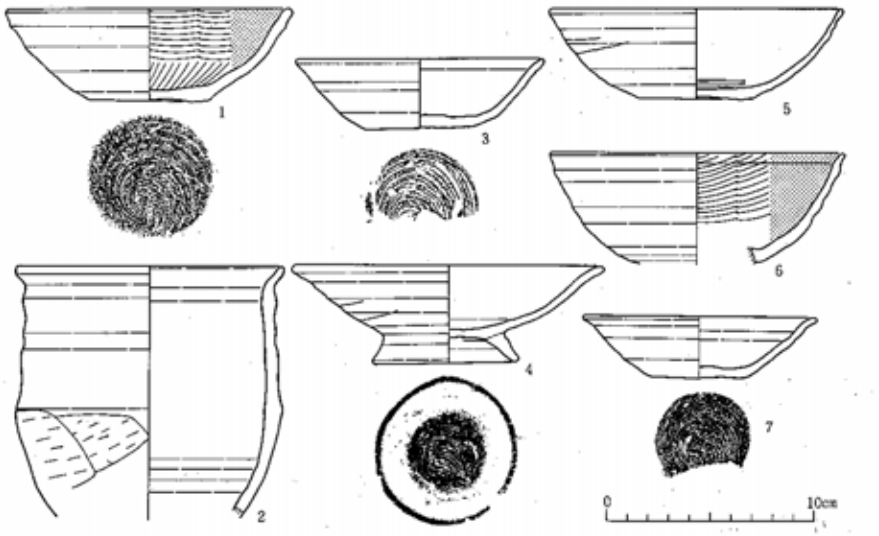
甕（第6図2）　製作にロクロを使用している。胴下部から内弯気味に立ち上り胴中央部に



		深さ(cm)	
ピット		16	
貯蔵穴状ピット		14	

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (7.5Y R3/3)	シルト	地山ブロック含む
2	褐灰色 (7.5Y R5/1)	シルト	木炭粒を少量含む
3a	暗褐色 (7.5Y R3/3)	砂質シルト	焼土塊を含干含む
3b	明赤褐色(5Y R5/6)	砂質シルト	焼土塊を多く含む
4	明赤褐色(5Y R5/6)		木炭を多量に含む
5	明赤褐色(5Y R5/6)	シルト	木炭を少量含む
6	明赤褐色(7.5Y R5/6)	シルト	木炭を少量含む

層No.	土色	土性	備考
1	極暗褐色(7.5Y R3/2)	シルト	地山粒を含む
2	黒褐色 (7.5Y R3/2)	シルト	炭化物を少量含む
3	極暗褐色(7.5Y R3/2)	シルト	地山粒含む



第６図　第２Ａ号住居跡と出土遺物

第２Ａ号住居跡出土土器計測表　（単位：cm）

図版番号	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高
第６図１	床	土師器	坏	13.9	5.8	4.5
第６図２	カマド	土師器	甕	(12.9)		
第６図３	カマド	赤焼土器	坏	(12.0)	5.2	3.4
第６図４	床＋堆積土２層	赤焼土器	高台付坏	15.1		4.7
第６図５	堆積土２層	土師器	坏	14.2	5.4	4.4
第６図６	堆積土(層不明)	土師器	坏	(14.2)		
第６図７	堆積土２層	赤焼土器	坏	(11.4)	4.5	3.0

至る。胴中央部から直立し、口縁部は短く外傾し、口縁端部は直立する。胴部最大径と口径はほぼ等しい。胴下部に横ヘラケズリが施される。

赤焼土器

坏（第6図3）　体部が直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切りにより切り離され、再調整は施されない。

高台付坏（第6図4）　体部が内弯気味に外傾し、口縁部は外反する。底部は回転糸切りにより切り離されている。高台は「ハ」字状を呈する付高台で、内面にはナデが施され、回転糸切り痕の一部を消している。

◦ 堆積土出土遺物

土師器・坏（第6図5・6）　いずれも製作にロクロを使用している。体部が内弯気味に外傾する。6の底部は欠失しており、切り離し技法・再調整は不明である。5は底部が回転糸切りにより切り離され、再調整は施されない。外面に右上りの粘土積み上げ痕が観察される。器面が荒れており、内面底部にわずかにヘラミガキが認められるのみである。

赤焼土器・坏（第6図7）　体部は直線的に外傾し、口縁部が外反する。底部は回転糸切りで切り離され、再調整は施されない。

第2Ｂ号住居跡（第7図）

〔重複〕　第2Ａ号住居跡によって切られている。

〔平面形・規模〕　東西約3.3m。南壁は攪乱のため不明であるが、南北の掘り方規模は約3.3mである。平面形は方形を呈する。

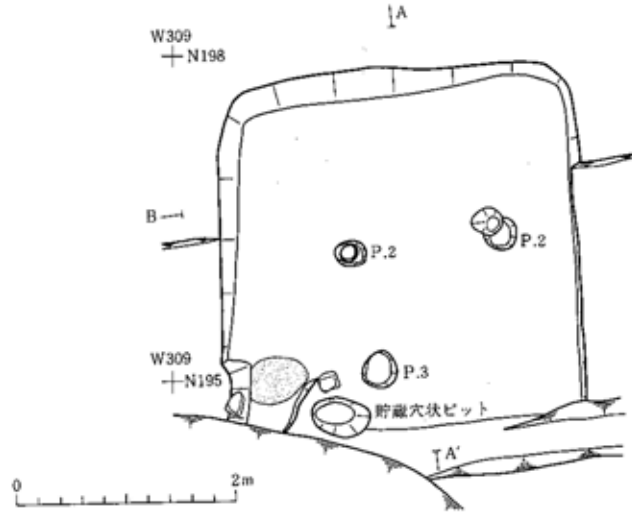
〔堆積土〕　5層にわかれる。第1層は厚く堆積している。第2・3層は薄く堆積している。第4・5層は壁際から流れ込むように堆積している。

〔壁〕　地山を壁としている。壁の立ち上りは急で、壁高は北壁中央部で24ｃｍである。

〔床面〕　ほぼ平坦で、しまっている。

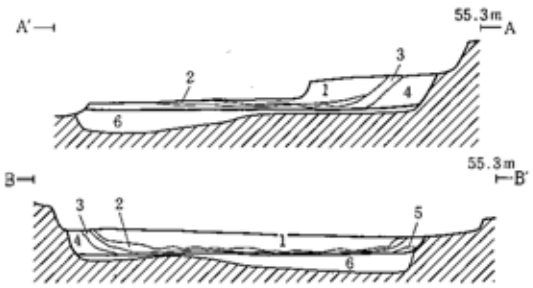
〔カマド〕　住居跡西南隅に付設されている。燃焼部側壁と床面の一部が検出された。なお、その付近から石が出土している。

〔柱穴〕　ピット4個が発見されたが、柱痕跡は認められない。また、位置・深さなどから

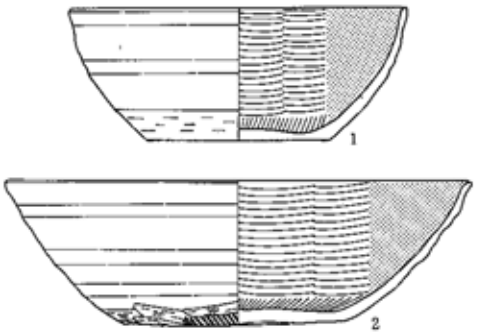


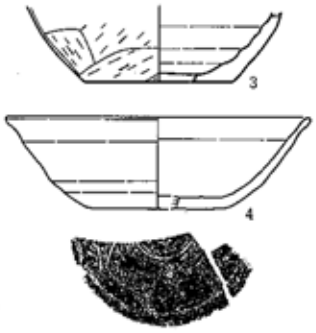
2 B号住居跡ピット

No.	1	2	3	貯蔵穴状ピット
深さ(cm)	25	8	8	19



層No	土　　色	土　性	備　考
1	極暗褐色 (7.5YR2/3)	砂質シルト	
2	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	粘質シルト	火山灰
3	黒 褐 色 (7.5YR3/2)	砂質シルト	
4	極暗褐色 (7.5YR2/3)	砂質シルト	
5	極暗褐色 (7.5YR2/3)	砂質シルト	
6		シルト	張り方埋土





0　　10cm

第2B号住居跡出土土器計測表　　(単位：cm)

図版番号	出土地点	種　類	器　種	口　径	底　径	器　高
第7図1	床	土師器	坏	15.4	8.4	6.1
第7図2	カマド	土師器	坏	21.4	10.0	6.6
第7図3	カマド	土師器	甕		6.9	
第7図4	貯蔵穴状ピット	須恵器	坏	(14.0)	(6.2)	(4.2)

第7図　第2B号住居跡と出土遺物

柱穴かどうか不明である。

〔貯蔵穴状ピット〕　カマドの左側にある。長径約50ｃｍ、短径約35ｃｍ、深さ約10ｃｍの楕円形を呈するピットである。

〔出土遺物〕出土遺物には土師器・須恵器・赤焼土器がある。住居跡に伴うと考えられる遺物には床面・カマド内・貯蔵穴状ピット内出土の土器がある。

◦ 住居跡に伴う遺物

土師器

坏（第7図1・2）　いずれも製作にロクロを使用している。1は体部が内弯気味にわずかに外傾し、そのまま口縁部に至る。外面は体部中央から下端にかけてと底部全面に回転ヘラケズリが施される。底部の切り離し技法は不明である。内面にはヘラミガキと黒色処理がみられる。ヘラミガキは底部が一定方向、体部から口縁部にかけては横方向である。2は体部が内弩気味に外傾し、口縁部がわずかに外反する。体部下端は手持ヘラテズリが施される。底部は全面手持ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。内面にはヘラミガキと黒色処理がみられる。ヘラミガキは底部では放射状、体部から口縁部にかけては横方向である。

甕（第7図3）　製作にロクロを使用している。胴部下半から底部にかけて遺存している。外面胴部・底部にヘラケズリが施される。

須恵器・坏（第7図4）　体部が内弯気味に外傾し、口縁部は外反する。底部は回転糸切りにより切り離され、再調整は施されない。

赤焼土器　小片のため図示できない。

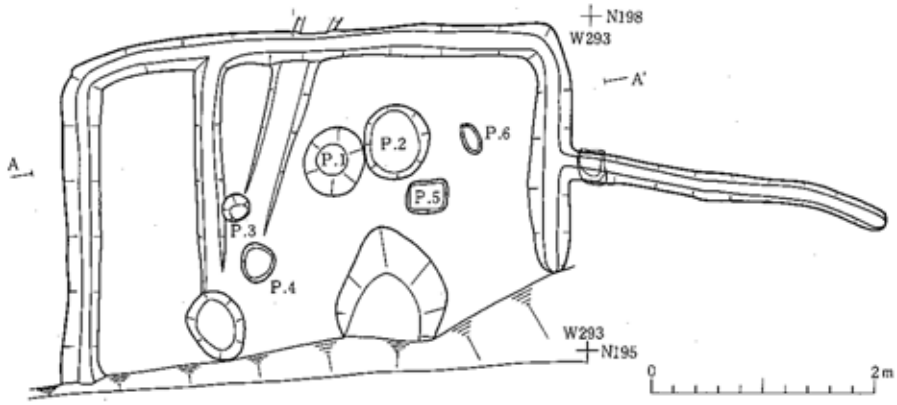
第3（A・B）号住居跡（第8図）

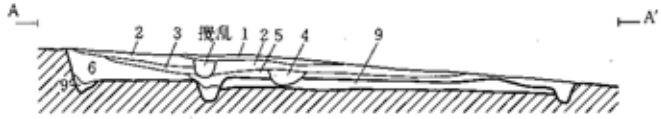
〔平面形・規模〕　本住居跡は拡張が行われている。当初の平面形は方形を呈し、東西規模は約3mである。その後、この床面に厚さ約20ｃｍの貼り床をして、西側に拡張している。拡張後の平面形は南壁が攪乱により失われているが、長方形を呈するものと考えられる。その規模は東西約4.5m、南北3m以上である。拡張前の住居跡を第3（B）号住居跡、拡張後の住居を第3（A）号住居跡とした。

〔堆積土〕　9層にわかれる。第1～8層は拡張後の堆積土である。第1層は住居跡中央やや西寄りに薄く、第2層は住居跡内のほぼ全域に、第3層は住居跡西側にわずかに、それぞれ堆積している。第5層は住居跡東側に、第6層は壁近くに堆積している。第7層は周溝に、第8層は溝に堆積している。第9層は掘り方堆積土である。

〔壁〕　地山を壁としている。壁の立ち上りは急で、壁高は遺存のよい西壁で約40ｃｍを測る。

〔床面〕貼り床部分で凹凸がみられるが、拡張部分は地山を床面とし平坦である。

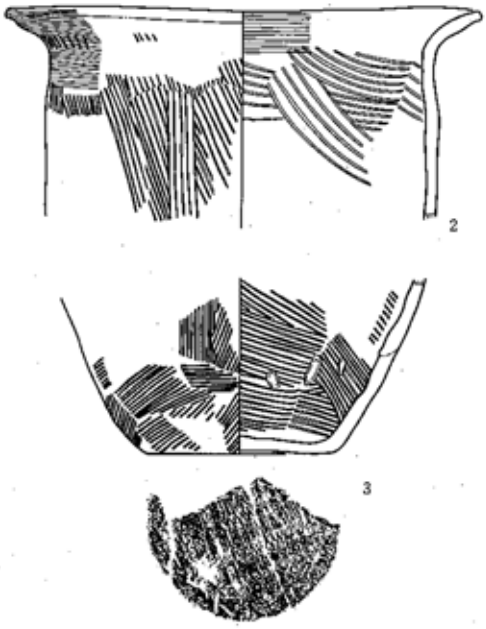




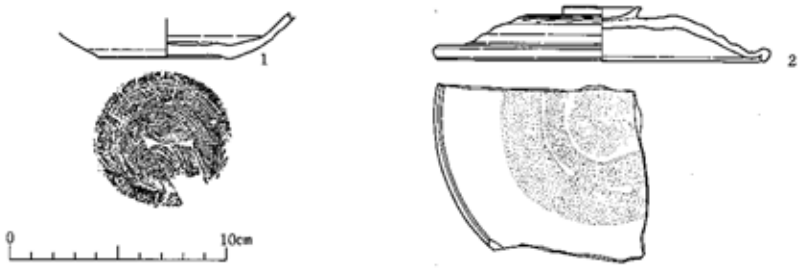
3(A・B)号住居跡ピット

No.	1	2	3	4	5	6	7
深さ(cm)	18	12	29	7	8	7	33

層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
3	明褐色(10YR7/6)	火山灰	褐色シルトを含む
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を少量含む
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を含む
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を外量に含む
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を含む
9	黄橙色(10YR7/8)	シルト	明褐色・暗褐色シルトを含む



第8図　第3(A・B)号住居跡と出土遺物(1)



第３号（Ａ・Ｂ）住居跡出土土器計測表　（単位：cm）

図版番号	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高
第８図２	ピット２	土師器	坏	(13.7)	6.4	3.9
第８図３	床＋ピット２	土師器	甕	(21.4)		
第８図４	床＋ピット２	土師器	甕		8.4	
第８図１	周溝	赤焼土器	坏	(18.4)	(10.2)	(4.6)
第９図１	堆積土（層不明）	須恵器	坏		6.2	
第９図２	堆積土５層	須恵器	蓋	(15.5)		

第９図　第３（Ａ）住居跡出土遺物（2）

〔カマド〕　認められなかった。

〔柱穴〕　住居跡内に7個のピットが検出された。ピット1～4は第3（B）号住居跡の床面で、またピット5～7は第3（A）号住居跡の床面でそれぞれ検出された。ピット1・2・5・6には焼土の堆積が認められた。いずれも柱痕跡は認められず、柱穴かどうかは不明である。

〔周溝〕　住居跡が遺存している部分の垂直下にすべて認められる。

〔その他の施設〕　西壁の東側に南北溝が認められる。この溝は第3（B）号住居跡の周溝と思われ、第3（A）号住居跡でも使用されている。また東壁から東にのびる溝がある。この溝の西端には石が認められる。溝は東に向って傾斜する。

〔出土遺物〕　出土遺物には土師器・赤焼土器・須恵器がある。住居跡に伴うと考えられる遺物には周溝・ピット内出土の土器がある。

◦ 第3（A）号住居跡に伴う遺物

土師器・甕（第8図2・3）　2は製作にロクロを使用していない。長胴形の甕で口縁部がゆるやかに外反する。内外面とも胴部に横および斜め方向の刷毛目が施される。口縁部には横ナデが施される。3は底部から直線的に外傾する。内外面とも刷毛目が施されている。底部外面に蓆状圧痕が認められる。

◦ 第3（B）号住居跡に伴う遺物

土師器・坏（第8図1）　製作にロクロを使用している。体部が内弯気味に外傾し、そのま

ま口縁部に至る。外面は体部下端と底部周縁に手持ヘラケズリ、底部中央にナデが施されている。切り離し技法はナデのため不明である。内面には横方向のヘラミガキと黒色処理がみられる。黒色処理は再酸化のため、底部にのみ認められる。

赤焼土器・坏（第8図4）　体部が内弯気味に外傾し、そのまま口縁部に至る。底部は回転糸切りにより切り離され、底部外縁にナデが施される。

◦ 第3（A）号住居跡堆積土出土遺物

須恵器

坏（第9図1）　体部は内弯気味に外傾する。底部は回転糸切りにより切り離され、再調整は施されない。

蓋（第9図2）　天井部は回転糸切りにより切り離され、その周縁には回転ヘラケズリが施される。周辺部は内弯気味に外傾して下り、短く外上方にのび口縁部に至る。口縁部は短く内屈し先端を丸くおさめる。扁平なリング状つまみを付け、ナデが施される。墨痕は認められないが、内面が磨滅し平滑であることから転用硯と考えられる。

(3) 礎石建物跡（第 10～12 図）

丘陵斜面の東側に位置する。基壇は旧表土・地山を削り出し、さらに積み土をして平坦面が作られている。その上に礎石建物が構築されている。基壇の北側と西側には幅約1m～1.5mの溝がみられる。基壇の東側と南側は壊されている。

〔建物跡〕　原位置に礎石が残っているものはないが、根石は確認できる。原位置を動いた礎石は4個確認された。建物規模は3間×3間で、建物方向は北が5°30′西に振れる。

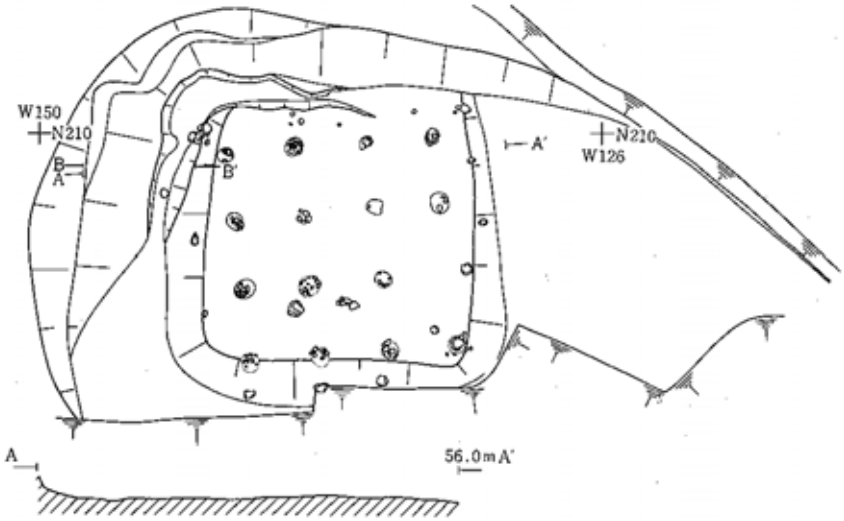
根石の掘り方は長径約80ｃｍ～90ｃｍ・短径約50ｃｍ～50ｃｍの楕円形を呈し、深さは約5ｃｍ～15ｃｍである。根石の大きさは長さ約10ｃｍ～40ｃｍ・幅約5ｃｍ～10ｃｍであり、河原石を利用している。原位置を動いた礎石は約80ｃｍ×約60ｃｍの河原石と直径約80ｃｍの円形に整形したものが認められる。

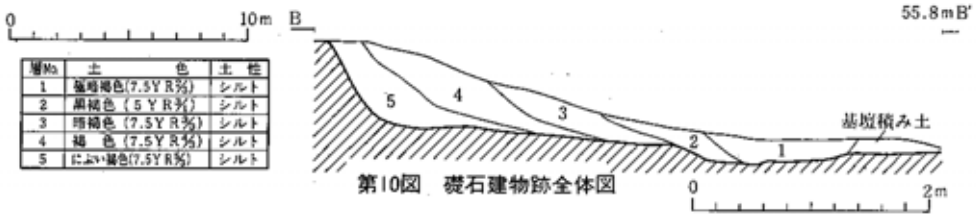
〔基壇〕　基壇は旧表土・地山を削り出して作られている。基壇の現存規模は上端が一辺約11.5m・下端が一辺約13.5m四方である。基壇の現存高は溝底面から約20ｃｍ～30ｃｍである。南側は南に傾斜した旧表土の上に暗褐色土を積み平坦面としているが、北側は削平されている。

〔溝〕　基壇の北辺南部から西辺にみられ、長さ径12m確認できる。幅は約1m～1.5mで深さは2ｃｍ～15ｃｍである。

〔出土遺物〕　根石掘り方から須恵器、溝から土師器・赤焼土器・須恵器・中世陶器・釘が出土している。

土師器・坏（第13図1）　底部破片である。外面は全面回転ヘラケズリが施されており、切





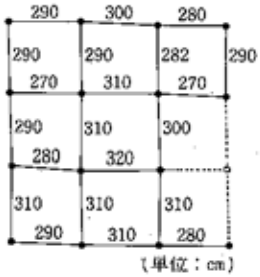
層No	土　　色	土　性
1	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト
2	黒褐色（5YR2/1）	シルト
3	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト
4	褐　色（7.5YR5/3）	シルト
5	にぶい黄色(7.5YR6/3)	シルト

第10図　礎石建物跡全体図

り離し技法は不明である。内面にはヘラミガキ・黒色処理がみられる。

赤焼土器・高台付坏（第13図2）　高台部～底部の破片である。底部の切り離し技法は不明である。

須恵器・小形高台付坏（第13図4～12）　製作にロクロを使用している。4～6は底部から外傾して立ち上がり、口縁端部がやや外反する。高台の端部はヘラケズリのためやや丸みをもっている。外面の体部下端から高台部端にかけてと口縁端部から内面の体部上半に手持ちヘラケズリが施される。底部外面と高台内面にはナデが施される。7～9は底部から外傾して立ち上がり、口縁部がやや丸みをもつものとがある。外面は口縁端部から高台部端にかけて手持ちヘラケズリが施されている。4は内面の体部上半に手持ちヘラケズリが及んでいる。底部外面と高台内面にはナデが施される。10は高台部を欠失しているが、外面の



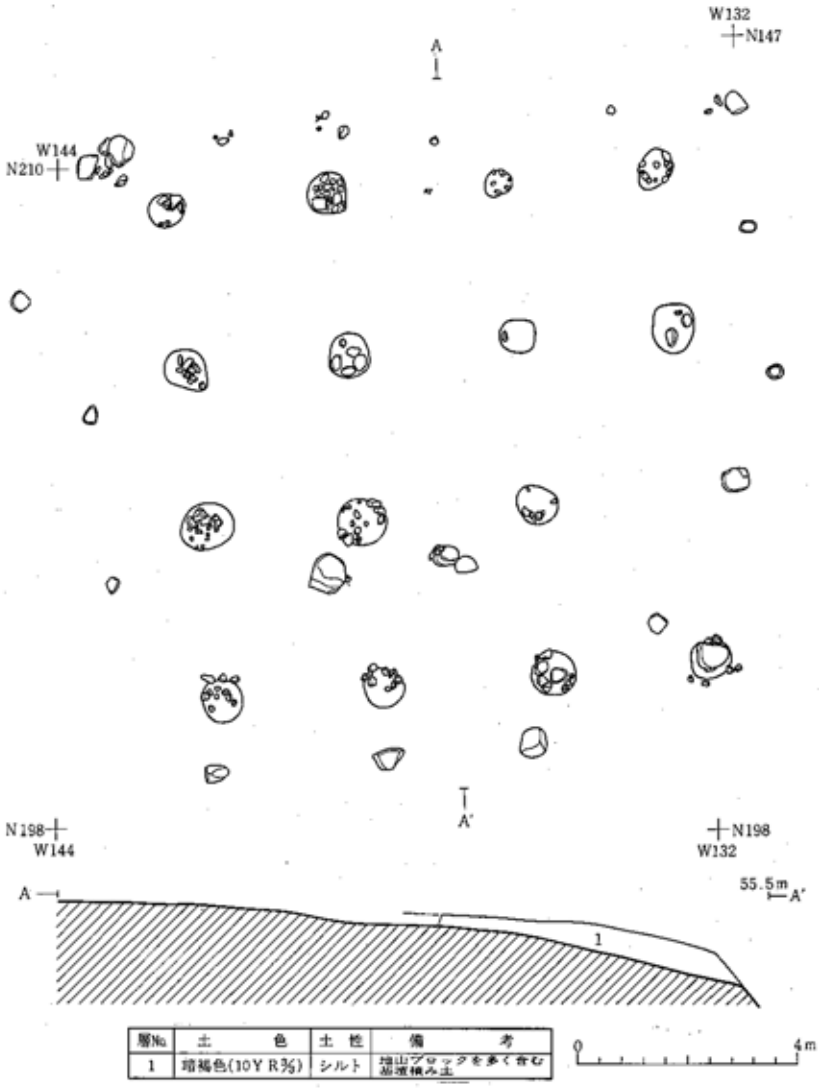
第11図　掘り方心々距離模式図

礎石建物跡溝出土土器破片集計

			外面ー内面	1層	2層
土師器	坏	口縁部	ロクローミガキ(黒)		4
		体　部	ロクローミガキ(黒)		4
			不明ーミガキ(黒)		1
		底　部	回転糸切りーミガキ(黒)		2
	甕	体　部	ロクローミガキ(黒)		1
			刷毛目ー不明		1
			ヘラケズリーミガキ(黒)		2
			不明ー不明		1
赤焼土器	坏	口縁部	ロクローロクロ	5	22
		体　部	ロクローロクロ	5	9
			不明ー不明	2	58
		底　部	回転糸切り		7
			不明		3

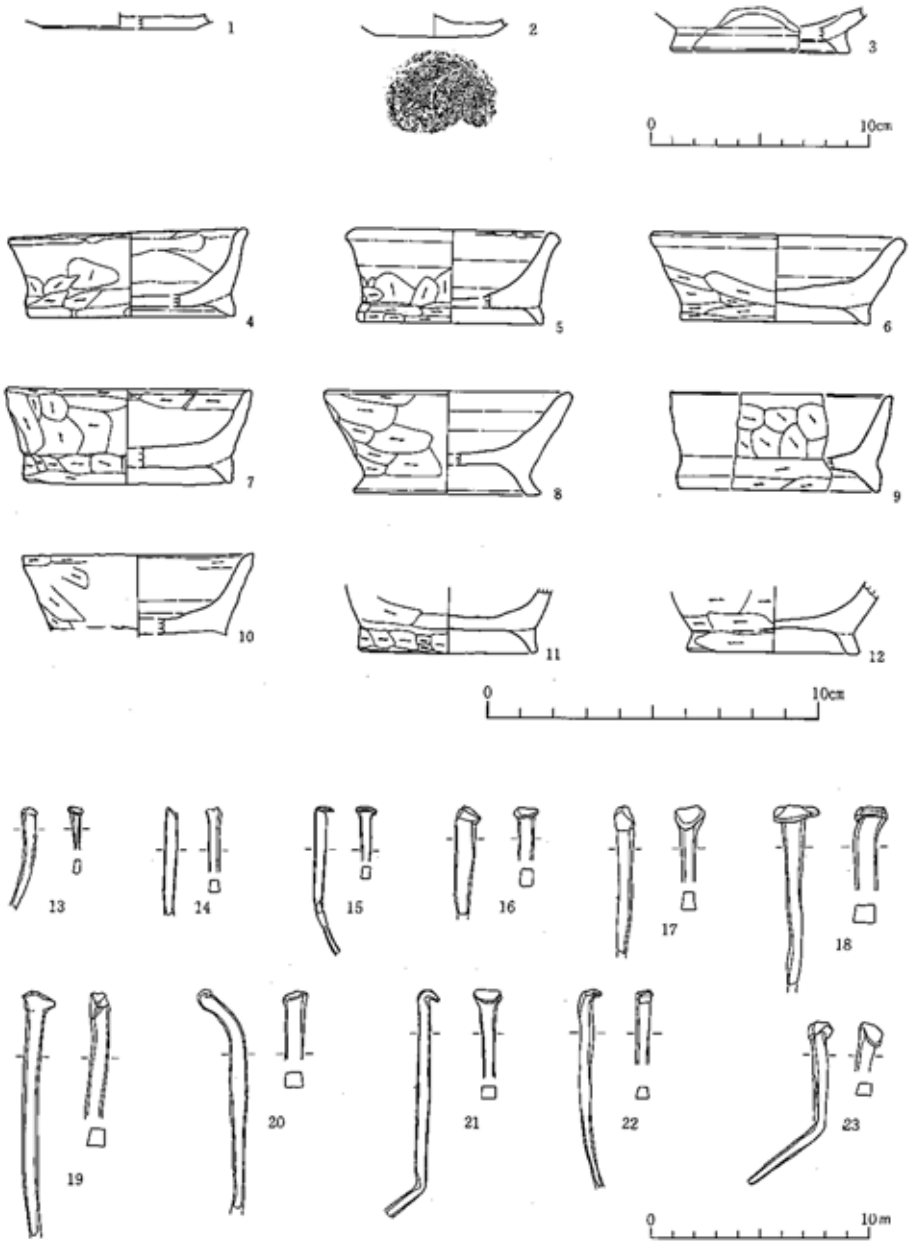
ヘラケズリからみて7～9に類似するものである。11・12は口縁部を欠失しているため、4～6に類似するのか7～9に類似するのか不明である。

釘（第13図13～23）　頭部を遺存するものは11点である。形態は頭部が一方向に折り曲げた角釘である。現存長は13・14が約5ｃｍ、15～18が約8ｃｍ、19～22が10ｃｍ以上のものである。



層No	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む 崩壊積み土

第12図　礎石建物跡



第13図　礎石建物跡・溝出土遺物

礎石建物跡および溝出土土器計測表　（単位：cm）

図版番号	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高
第13図1	溝堆積土2層	土師器	坏		6.9	
第13図2	溝堆積土2層	赤焼土器	坏		5.0	
第13図3	溝堆積土2層	赤焼土器	高台付坏			
第13図4	溝堆積土(層不明)	須恵器	高台付坏	(7.2)		2.4～2.7
第13図5	溝堆積土1層	須恵器	高台付坏	(6.4)		2.8
第13図6	溝堆積土2層	須恵器	高台付坏	7.6		2.1
第13図7	溝堆積土2層	須恵器	高台付坏	7.4		2.8
第13図8	溝堆積土(層不明)	須恵器	高台付坏	7.5		3.1
第13図9	礎石掘り方	須恵器	高台付坏	(6.6)		2.9
第13図10	溝堆積土1層	須恵器	高台付坏	(7.0)		
第13図11	溝堆積土(層不明)	須恵器	高台付坏			
第13図12	溝堆積土(層不明)	須恵器	高台付坏			

(4) 竪穴遺構

第1号竪穴遺構（第14図）

〔平面形・規模〕　北側が遺存しているのみであるが、平面形は方形を基調とするものと思われる。北辺は約11.5m、西辺・東辺の現存長はそれぞれ約2.5m、約3mである。

〔堆積土〕　4層にわかれ、壁際から斜めに流れ込んでいる。

〔壁・床面〕　地山を壁・床面としている。壁は斜めに立ち上る。壁高は約70ｃmである。床面は平坦であり、壁際が約70ｃm～80ｃmの幅で深さ3ｃm～7ｃm凹む。

〔出土遺物〕　第3・4層から土師器・赤焼土器・釘が出土している。

土師器・坏（第14図1）　体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上り、口縁部を丸くおさめる。外面は全体に磨かれ、内面には漆状の付着物がみられる。

赤焼土器

坏（第14図2）　体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁端部を丸くおさめる。体部下端に粘土積み上げ痕がみられる。

第1号竪穴遺構出土土器破片集計（口縁部・底部）

		土師器	赤焼土器
口縁部		34	352
底部	回転糸切り	12	92
	回転ヘラケズリ		2
	不明	5	33

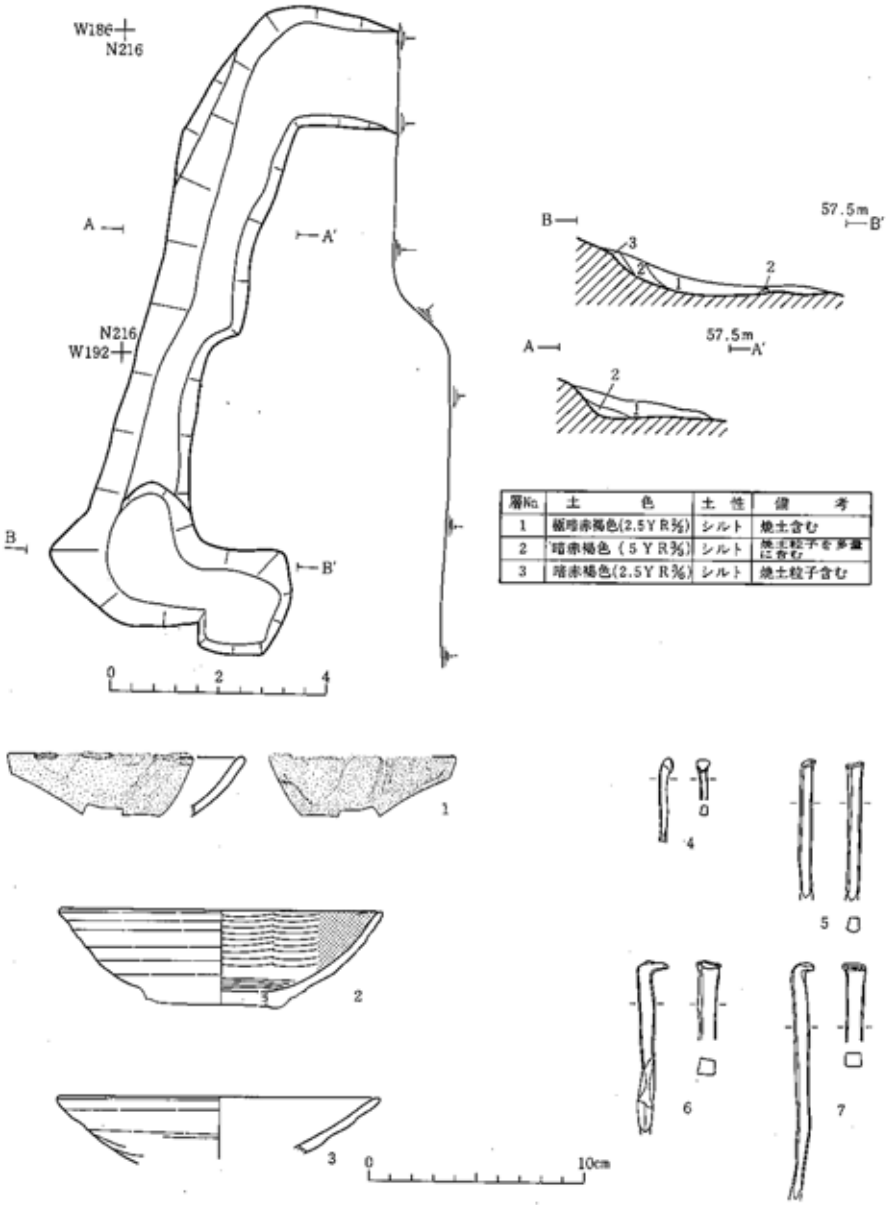
高台付坏（第14図3）　体部は内弯気味に外傾し、口縁部でわずかに外反する。高台部は剥落している。切り離し技法はナデのため不明である。

釘（第14図4～7）　第4層から4本出土している。頭部を一方向に折り曲げた角釘である。現存長は4ｃm～10ｃmである。

第2号竪穴遺構（第15図）

〔重複〕　第4号土壙に切られている。

〔平面形・規模〕　東側で攪乱を受けている。南北約3.2m、東西2.6m以上である。平面形は方形を呈するものと思われる。

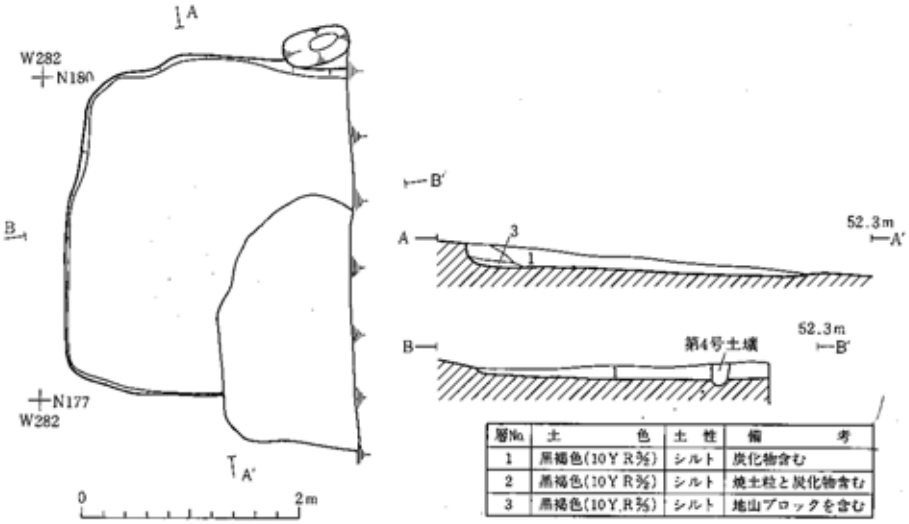


層No.	土　　色	土 性	備　　考
1	極暗赤褐色(2.5YR2/3)	シルト	焼土含む
2	暗赤褐色（5YR3/3）	シルト	焼土粒子を多量に含む
3	暗赤褐色(2.5YR3/3)	シルト	焼土粒子含む

第1号竪穴遺構出土土器計測表　　（単位：cm）

図版番号	出 土 地 点	種　　別	器　　種	口　　径	底　　径	器　　高
第14図1	堆 積 土 3 層	赤 焼 土 器	坏	14.8		
第14図2	堆 積 土 3 層	赤 焼 土 器	高 台 付 坏	15.0		

第14図　第1号竪穴遺構と出土遺物



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土粒と炭化物含む
3	黒褐色(10Y,R3/2)	シルト	地山ブロックを含む

第15図　第２号竪穴遺構

〔堆積土〕　3層にわかれる。第1層は北壁付近を除く全域に堆積する。第2・3層は北壁付近にみられ、流れ込むように堆積している。

〔壁〕　地山を壁としている。北壁の立ち上りは急で、南壁の立ち上りは緩やかである。

〔床面〕　地山を床面とし、平坦である。

〔柱穴・周溝・カマド〕　認められない。

〔出土遺物〕　出土遺物には土師器・赤焼土器がある。いずれも堆積土出土の小片である。

(5) 土　壙（第16図）

第1号土壙

〔平面形・規模〕　上端は160ｃｍ×60ｃｍ、底面は115ｃｍ×30ｃｍの長方形を呈するもので、深さは60ｃｍである。

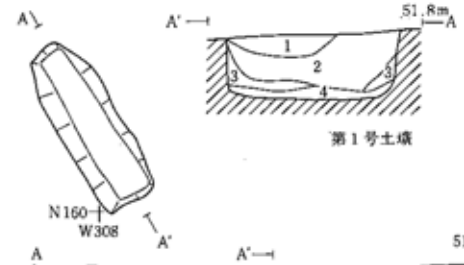
〔堆積土〕　4層にわかれる。第1層は土壙南半に、第2層は全域に、第3層は流れ込むようにそれぞれ堆積している。第4層は地山ブロックを多量に含み、ほぼ水平に堆積している。

〔壁・底面〕　地山を壁・底面としている。底は平坦で、壁は直立に近い。底面と壁の境は丸味をもっている。

〔出土遺物〕　なし。

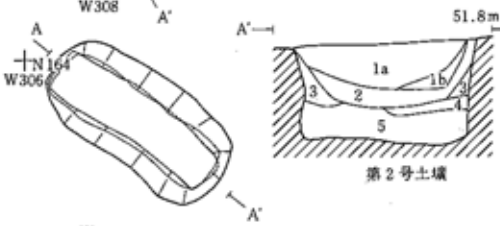
第2号土壙

〔平面形・規模〕　上端は190ｃｍ×90ｃｍ、底面は175ｃｍ×60ｃｍの長方形を呈するもので、深さ



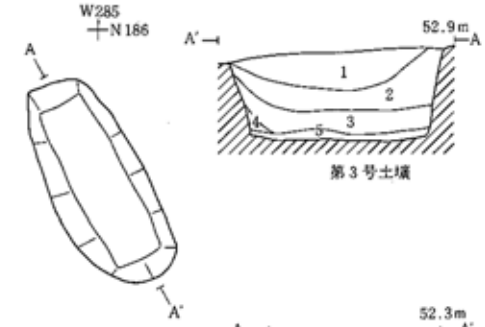
第1号土壙

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山ブロックを含む
2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	
3	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロックを多量に含む
4	にぶい黄褐色(10YR6/3)	砂質シルト	地山ブロックを多量に含む



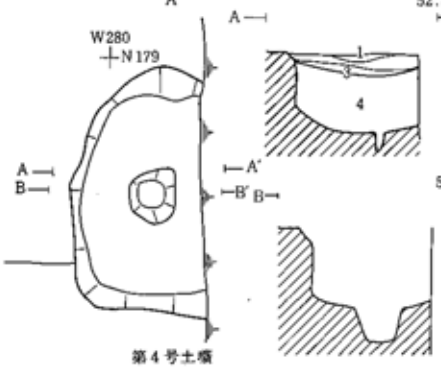
第2号土壙

層No.	土色	土性	備考
1a	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
1b	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを少量含む
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む
4	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	
5	にぶい黄褐色(10YR6/3)	砂質シルト	



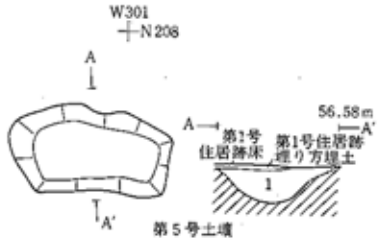
第3号土壙

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	



第4号土壙

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土粒を含む
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
4	暗褐色(10YR3/4)		地山ブロックを少量に含む



第5号土壙

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YD3/3)	シルト	地山ブロックを含む

第16図　土　壙

は95ｃｍである。

〔堆積土〕　4層にわかれる。第1層は土壙のほぼ全域に、第2層は主として北西壁際から流れ込むように、第3層は壁際から流れ込むようにそれぞれ堆積している。第4層は土壙北半に、第5層は土壙全域にそれぞれほぼ水平に堆積している。

〔壁・底面〕　壁はほぼ直立し、底面にはわずかに凹凸がみられる。

〔出土遺物〕　第2～4層で土師器体部小片が出土している。

第3号土壙

〔平面形・規模〕　上端は205ｃｍ×90ｃｍの長楕円形を、底面は165ｃｍ×60ｃｍの長方形を呈する。深さは85ｃｍである。

〔堆積土〕　5層にわかれる。第1層は土壙のほぼ全域に、第2層は全域に堆積している。第3層は東南壁から流れ込むように、第4層は東南壁際に、第5層はほぼ水平にそれぞれ堆積している。

〔壁・底面〕　地山を壁・底面としている。壁の立ち上りは直立に近い。底面にはわずかな凹凸がみられる。

〔出土遺物〕　なし。

第4号土壙

〔重複〕　第2号竪穴遺構を切っている。

〔平面形・規模〕　東側が攪乱を受けている。南北約2.3m、東西1.2m以上である。平面形は不整楕円形を呈するものと思われる。

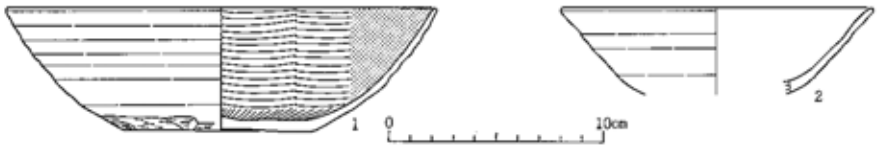
〔堆積土〕　4層にわかれる。第1～3層は薄く堆積している。第4層は地山ブロックを多量に含み、第1～3層とは明瞭な相違が認められ、人為的に埋められたものと思われる。

〔壁・底面〕　地山を壁・底面としている。壁は直立する。底面に直径約20ｃｍ、深さ約30ｃｍのピットが認められる。

〔出土遺物〕　第1～3層から須恵器、第4層上面から土師器が出土している。

土師器・坏（第17図1）　土壙の中央第4層上面から出土した。製作にロクロを使用している。体部は内弯気味に外傾し、そのまま口縁部に至る。外面は体部下端と底部全面に手持ヘラケズリが施され、底部切り離し技法は不明である。内面にはヘラミガキと黒色処理がみられる。ヘラミガキは底部では放射状、体部から口縁部にかけては横方向である。

須恵器・坏（第17図2）　体部は直線的に外傾する。底部欠失のため切り離し技法は不明である。



第４号土壙出土土器計測表　（単位：cm）

図版番号	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高
第17図１	堆積土３層	土師器	坏	(19.9)	8.7	5.7
第17図２	堆積土１層	須恵器	坏	(14.5)		

第17図　第４号土壙出土遺物

第5号土壙

〔重複〕　第1号住居跡に切られている。

〔平面形・規模〕　150ｃｍ×80ｃｍの楕円形を呈し、深さは15ｃｍである。

〔堆積土〕　1層である。

〔壁・底面〕　壁の立ち上りは緩やかで、底面は凹む。

〔出土遺物〕　なし。

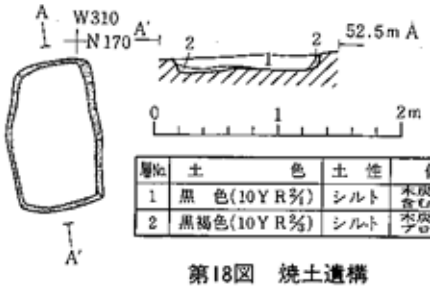
(6) 焼土遺構（第18図）

〔平面形・規模〕120ｃｍ×75ｃｍの長方形を呈し、深さは10ｃｍである。

〔堆積土〕　2層にわかれる。第1層は全域に、第2層は壁際から流れ込むように堆積している。

〔壁・底面〕　地山を壁・底面としている。壁の立ち上りはほぼ直立で、壁面は焼けている。底面は南半でわずかに落ち込む。

〔出土遺物〕　なし。



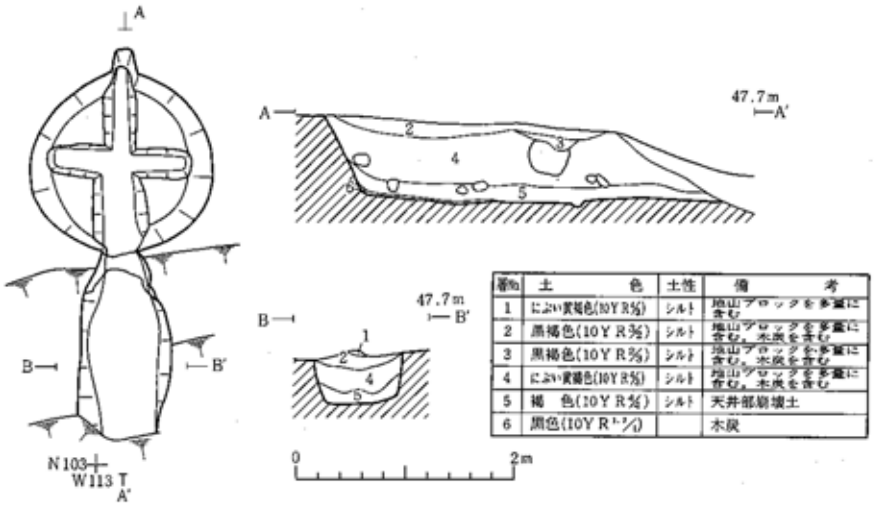
層No.	土色	土性	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	木炭・焼土粒を多く含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭・焼土粒・地山ブロックを多く含む

第18図　焼土遺構

(7) 窯　跡（第19図）

〔平面形・規模〕　煙道・焼成室・窯口・窯前庭からなり、全体の形は柄鏡状を呈する。現存主軸長は358ｃｍである。

〔堆積土〕　5層にわかれる。第1層は前庭部削平後の盛土である。第2層は主として焼成室と窯口に、第3層は主として窯口に、第4層は窯全体にそれぞれ堆積している。第5層は天



番号	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む。木炭を含む
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む。木炭を含む
4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む。木炭を含む
5	褐色(10YR4/4)	シルト	天井部崩壊土
6	黒色(10YR1.7/1)		木炭

第19図　窯　跡

井部崩落土と思われる。第6層は焼成室に薄く堆積している。第2～4層は人為的に埋められたものと思われる。

は褐色シルトで天井部崩落土と思われる。第2～4層は人為的埋土と思われる。

〔窯前庭〕　長さ約1.5m、最大幅約0.8m、深さ約0.6mを測る。横断面形は「U」字状を呈する。窯口に向って幅をやや減ずる。

〔窯口〕　底面幅約0.2m、高さ約0.25mのトンネル状を呈する。天井部の現存厚は約0.25mである。

〔焼成室〕　上端の直径約1.65m、下端の直径約1.25mの円形を呈する。深さは約0.5mである。底面に幅約0.3m～0.5m・深さ約0.2m～0.25mの「＋」字状の溝がある。この溝の南北溝北端は煙道に続く。底面は窯口部に向ってわずかに傾斜している。

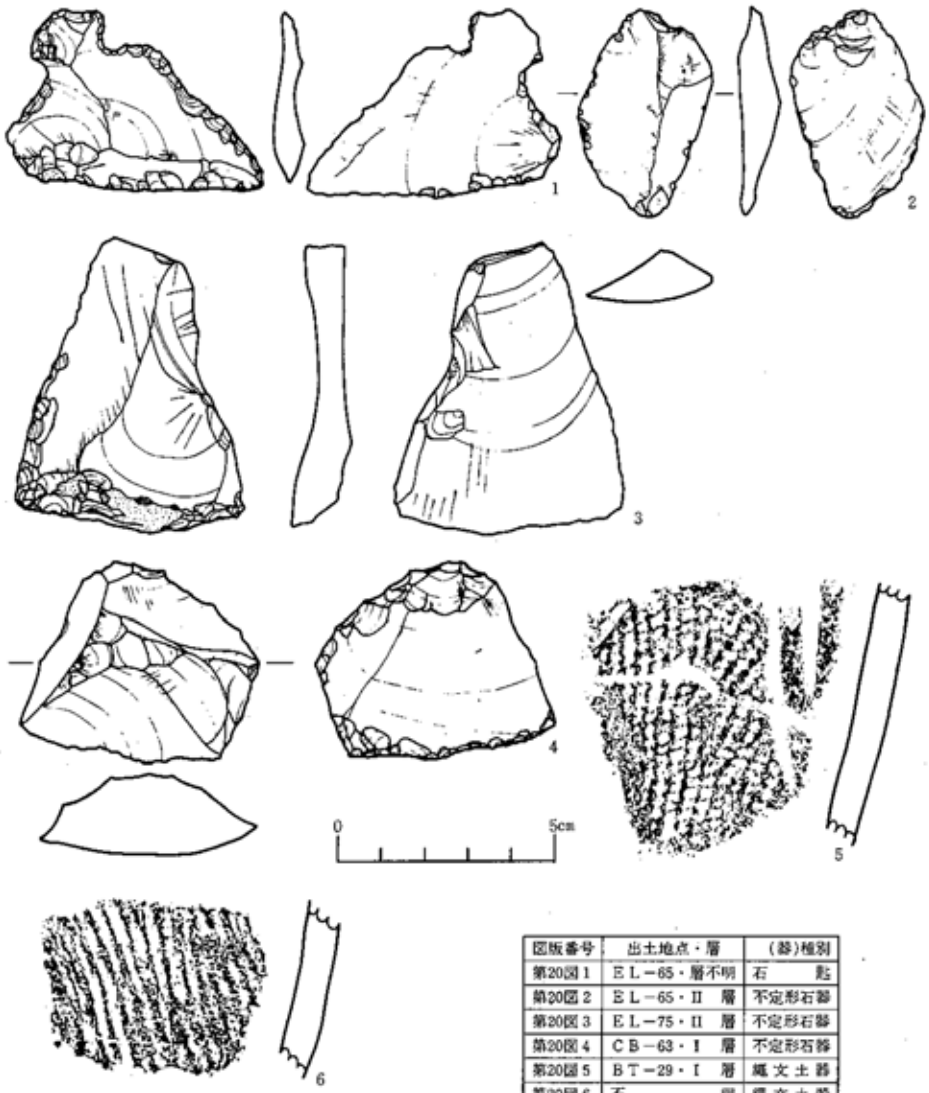
〔出土遺物〕　なし。

(8) 遺構以外の出土遺物

調査区の丘陵斜面基本層位（Ⅰ・Ⅱ）および河岸段丘面基本層位（Ⅰ～Ⅲ）から出土している。

石器（第20図1～4）　1は横型石匙で、3つの縁辺に刃部がみられる。2～4は不定形石器である。2は使用痕のある縦長剥片である。3は台形状を呈する縦長剥片で、2つの側辺に調整が施される。4は台形状を呈する剥片で、2つの側辺に調整が施される。

縄文土器（第20図5・6）　1は縦位の沈線文と複節縄文（ＲＬＲ）が施される。2の地文は

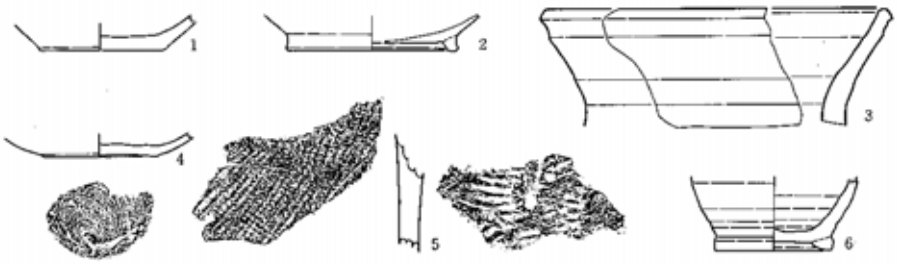


図版番号	出土地点・層	(器)種別
第20図1	ＥＬ－65・層不明	石　　匙
第20図2	ＥＬ－65・Ⅱ　層	不定形石器
第20図3	ＥＬ－75・Ⅱ　層	不定形石器
第20図4	ＣＢ－63・Ⅰ　層	不定形石器
第20図5	ＢＴ－29・Ⅰ　層	縄文土器
第20図6	不　　明	縄文土器

第20図　遺構以外の出土遺物(1)

無節縄文（L）である。

土師器（第21図1～3）　1は坏で体部下端から直線的に外傾する。底部外面は全面手持ヘラケズリが施されている。内面の再調整は不明である。2は高台付坏で、体部下端は直線的に外傾する。高台は短く、端部がわずかに外反する。底部外面は回転糸切りにより切り離され、



遺構以外の出土土器計測表　（単位：cm）

図版番号	出土地点・層	種別	器種	口径	底径	器高
第21図1	C I −49・II層	土師器	杯		5.8	
第21図2	B N −49・III層	土師器	高台付杯			
第21図3	B O −48・I層	土師器	甕			
第21図4	C C −48・II層	赤焼土器	杯			
第21図5	D S −78・II層	須恵器	長頸壺		5.3	
第21図6	B O −49・II層	中世陶器	擂鉢			

第21図　遺構以外の出土遺物

その後ナデが施される。3は甕口縁部で、製作にロクロを使用している。外反し、口縁端部で内弯気味に外傾する。

赤焼土器（第21図4）　坏底部から体部下端の破片である。体部下端は内弯気味に外傾する。底部は回転糸切りにより切り離され、再調整は施されない。

須恵器（第21図5・6）　5は甕の小片である。外面に正格子叩き目、内面に青海波文がみられる。6は高台付壺である。体部は内弯気味に外傾する。高台は付高台で断面三角形を呈する。底部外面はナデである。

中世陶器（第21図7）　擂鉢の口縁部小片である。内弯気味に外傾し、口縁端部は外反する。口縁端部上面を平らにつくる。胎土にスサ状のものが認められる。色調は外面が明赤褐色（5ＹR5/2）、内面はにぶい黄褐色（2.5ＹR5/3）、胎土は灰色（7.5ＹR6/1）である。

Ⅳ. 考　　察

1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は4軒検出されている。住居跡に伴うと考えられる土師器坏はいずれも製作にロクロを使用し、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。このような特徴をもつ土師器は表杉ノ入式（氏家：1957）と考えられるもので、平安時代に属する。ところで、第2A・2B号住居跡では切り合いが認められ、その前後関係が把握された。すなわち第2B号住居跡が古く、第2A号住居跡が新しいことが認められたのである。そこで、ここではこの2軒の住居跡出土土器について若干の検討を行うことにしたい。

第2A号住居跡に伴うと考えられる土器は土師器坏・甕、赤焼土器坏・高台付坏で、各1点ずつ、計4点である。土師器坏は体部が内弯気味に外傾し、そのまま口縁部に至るもので、底部は回転糸切りで再調整がないものである。甕は製作にロクロを使用している。口縁部径と胴部最大径がほぼ同じである。胴部下半にヘラケズリを施している。赤焼土器坏は体部が直線的に外傾し、口縁部でわずかに外反するもので、底部は回転糸切りで再調整はない。高台付坏は体部が内弯気味に外傾し、口縁部が外反する。高台は付高台で「ハ」字状に開く。底部は回転糸切りである。

第2B号住居跡に伴うと考えられる土器は土師器坏2点、須恵器坏1点である。土師器坏は体部が内弯気味で、外傾が少なく、体部下半から底部全面に回転ヘラケズリを施すものと体部が内弯気味に外傾し、口縁部でわずかに外反し、体部下端と底部全面に手持ヘラケズリを施すものがある。須恵器坏は体部中央でわずかに内弯しながら外傾し、口縁部が外反するもので、底部は回転糸切りで再調整はない。

以上が第2A・2B号住居跡に伴うと考えられる土器である。この2軒の住居跡に共通してみられる土器は土師器坏であるので、その比較を行ってみたい。まず技法に注目すると第2A号住居跡では回転糸切りで再調整がないものであるが、第2B号住居跡では体部下半（下端）および底部全面に再調整が行われている。つぎに、形態についてみると底径に差があることがわかる。第2A号住居跡では口径1に対する底径が0.41であるのに対して第2B号住居跡では0.53、0.47である。このことから、第2A・2B住居跡の土師器坏には技法・形態に相違があることが認められる。

第2A・2B号住居跡は切り合い関係があり、その前後関係は明瞭である。また、この2軒の住居跡に伴う土師器坏にも技法・形態に差がある。このような土師器の差は年代差と考えられている（丹羽・小野寺・阿部：1981）。第2A・2B住居跡の土師器坏においても年代差と考えることには矛盾はない。しかし、出土個体数（図示遺物）が少ないことから十分な比較がで

きない点で問題がある。また他遺跡との比較も出土個体数の僅少さから困難である。

つぎに竪穴住居跡の構造についてみてみたい。平面形は方形を基調としている。床面は第3（B）号住居跡の拡張部分は地山を床面とし、第1・2B号住居跡では貼り床している。柱穴と確認できるものはなかった。周溝は第1・3（A・B）号住居跡で認められ、前者の周溝は全周しない。第3（A・B）号住居跡では、さらに住居跡内の西寄り部分で北側周溝に直交する南北溝が認められた。この溝は幅・深さとも周溝とほぼ同じものである。第3（B）号住居跡の床面はこの溝の西側には認められないことから、第3（B）号住居跡の西側周溝の可能性が考えられる。また、この溝が拡張後の第3（A）号住居跡においても機能していたことは堆積土の観察から確認できることである。

第3（A）号住居跡では東壁中央部から住居外にのびる東西溝が認められた。この溝の西端の底面高は周溝とほとんど同じであるが、東に向い緩かに傾斜する。また溝西端では石が溝に蓋をするような状態で認められた。さらに周溝内堆積土の観察から住居跡廃絶時には周溝が溝状を呈していたことが考えられる。以上のことから、この溝は排水用の溝の可能性が考えられる。このような溝は古川市藤屋敷遺跡（加藤・佐藤：1980）や田尻町天狗堂遺跡（佐藤・手塚：1978）などにみられる。

第2A号住居跡のカマドは住居跡北壁東寄りに付設されたもので、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部側壁は石組みされ粘土で補強されている。燃焼部底面には石の支脚も認められた。このように燃焼部を石組みにするカマドは仙台市沼原A遺跡（佐藤：1980）、同山田上ノ台遺跡（渡辺・主浜・柳沢：1981）、村田町西原遺跡（熊谷：1980）、白石市御所内遺跡（太田：1980）などにあり、いずれも平安時代の竪穴住居跡である。

貯蔵穴状ピットは第2A・B号住居跡で認められた。カマドの脇に位置し、楕円形を呈するものである。貯蔵穴状ピットは県内の平安時代竪穴住居跡で多くの類例が認められる。

以上、竪穴住居跡の年代と構造について若干の検討を行った。その結果、竪穴住居跡の年代については平安時代と考えられ、さらに第2A・B号住居跡については切り合いから時期差のあることが判明した。竪穴住居跡の構造については、平面形は方形を基調とするものの、そのほかの点では各住居跡に相違がみられた。第2A号住居跡にみられた石組みカマドは県南に多く分布していることが指摘されている（真山：1981）。本遺構もその一例と理解することができよう。また第3（A）号住居跡の住居外にのびる東西溝も特徴の一つと考えることができる。

2．礎石建物跡

本遺構からは土師器・赤焼土器・須恵器・中世陶器が出土している。このうち須恵器の小形高台付坏1点が根石掘り方から出土し、そのほかの遺物は北側および西側の溝堆積土から出土

している。須恵器の小形高台付坏は溝堆積土第1・2層からも出土している。このほかに出土例がなく、この土器自体で年代を求めることは困難である。溝堆積土第1層から中世陶器甕体部破片が1点、第1・2層から土師器・赤焼土器の小片が出土している。赤焼土器は土師器より多く出土している。土師器底部には回転ヘラケズリが施されるものと回転糸切りで切り離され再調整が施されないものがある。赤焼土器は底部が回転糸切りで切り離され再調整が施されないもので、口縁部は外反するものが多い。

以上のことから須恵器の小形高台付坏の廃棄年代は平安時代から中世の間に入るものと考えられ、本遺構の年代も平安時代から中世の間と考えることができよう。

調査の結果、基壇上からは3m等間で並ぶ15か所の根石群のほかに周辺から礎石と考えられる1m前後の石が検出されている。このことからこの遺構は3間×3間の礎石をもつ建物跡と考えられる。

礎石建物跡は御堂平遺跡の北東部にあり、笊川左岸の河岸段丘に面した丘陵裾を東西約30m南北15mの範囲で削平した長方形の平場に立地している。このため北側は平場をとりかこむように丘陵斜面がせまり南側は笊川の段丘に面して開けており、段丘面から約7m高くなっている。また、周囲にはこの建物跡と関係する建物跡の遺構はない。したがって、この礎石建物跡は単独で存在していたものと思われる。

県内で平安時代から中世末と考えられている礎石建物跡の調査例は花山村花山寺跡（伊東・丹羽・真山：1979）大和町信楽寺跡（高橋・加藤：1972）亘理町三十三間堂（宮城県教育委員会：1967）白石市堂田遺跡（志間：1971）などである。この他に現存する例で角田市高蔵寺阿弥陀堂（小倉：1958）が報告されている。

この中で単独に存在する遺跡の例として、堂田遺跡の5間×4間の礎石建物跡があげられる。この遺構は河岸段丘上に立地した平安時代末の仏堂として考えられている。立地条件は本遺構といくぶん似ているが建物の形態・規模の点で違いが認められる。

このほかの花山寺跡と高蔵寺阿弥陀堂は平安末の臨池伽藍の一部とされ、信楽寺跡は中世末の伽藍跡とされている。三十三間堂遺跡の建物は丘陵頂部に立地する平安時代の寺院の伽藍とする考え（宮城県教育委員会：1967）と倉庫とするとする考え（伊藤：1978）がある。この中で三十三間堂遺跡の第Ⅱ建物跡と第Ⅸ建物跡が3間×3間の正方形の礎石建物跡であることで平面形に類似性が認められる。

以上のように県内で、立地と平面形のどちらかに類似が認められるものはあるが、両方とも共通する例はない。また礎石建物の性格については寺院・仏堂・倉庫とされている。本遺跡の場合は礎石に関係した遺構がなく単独に存在していることから堂田遺跡のような仏堂とされるものにあたると考えられる。

このことから、この礎石建物跡は平安末～室町時代のある時期に笊川に南面した丘陵裾に建てられた独立した宝形造りの3間×3間の仏堂の可能性がある。本建物の存続期間について考えると、江戸時代に編纂された『封内風土記－名取群鈎取邑』には3間×3間の廃堂の記載が見られないことから江戸時代には建物は存在していなかったと思われる。

3．土器埋設遺構

楕円形を呈するピットに埋設された縄文土器が検出された。土器は胴部下半を欠失する。楕円文と懸垂文が沈線で描かれ、地文として撚糸文（L）が充塡される。このような文様構成は大衡村上深沢遺跡（宮城県教育委員会：1978）のＩC1ａ4類に例をみることができ大木9式土器と考えられる。本遺構のように大木9式土器を埋設した付近の例としては仙台市北前遺跡（佐藤・斎野：1982）がある。土器埋設遺構の性格として埋葬施設の可能性が指摘されている（丹羽・三浦・加藤：1973、猪越：1973）が、本遺構では土器以外に出土遺物がなく、その性格については不明である。

4．竪穴遺構

2基認められたが、規模・形態に差違がある。第1号竪穴遺構は壁際に周溝をもつもので、第2号竪穴遺構より大きい。第2号竪穴遺構は方形を基調とするものである。ともに堆積土からロクロ土師器・赤焼土器が出土していることから、平安時代の遺構の可能性が考えられる。その性格については不明である。

5．土　壙

土壙は12基確認され、そのうち5基を精査した。第1～3号土壙は長方形を呈し、底面はほぼ平坦で、壁の立ち上りは直立に近く、長軸方向が北西－南東の方向をとるという共通点がある。第2号土壙の第2～4層から土師器小片が出土しているが、時期を特定することはできない。またその性格も不明である。

第4号土壙は円形を基調とし、壁の立ち上りは直立に近い。底面には上端直径約50ｃm、下端直径約25ｃm、深さ約30ｃmのピットが認められた。その上に人為的に埋められたと思われる土が底面から厚さ約40ｃm～50ｃm認められ、その上に厚さ約20ｃmの自然堆積土が認められた。土器は前者の最上面で認められ、その出土位置はピットの真上にあたる。これらのことからこの土器と土壙との関連が考えられ、その年代は平安時代に求めることができよう。本土壙のような形態をもつものに対しては「おとし穴」という見解（霧ヶ丘遺跡調査団：1973）があり類例は縄文時代早期後半～前期前半に多い。さらに縄文時代中期後半～晩期に属する例もある（今村：

1983）。また色麻町上新田遺跡では平安時代に属する例がある（小井川：1981）。このようなことから、この形態の土壙はかなり長期にわたって存在することが知られる。また、これらの土壙の堆積土は自然堆積の状態を示すものが多い。本土壙は形態的な類似はみられるものの、土壙内の土が人為的に埋められたという点で大きな相違があり、さらに埋め土上面で土器が出土していることから「おとし穴」とすることには躊躇せざるを得ない。本土壙の埋め土・土器の状態は墓壙としての蓋然性を示唆するものと理解される。しかし骨・副葬品等の遺物が出土していないことから墓壙と断定することはできない。今後の類例の増加をまちたい。

第5号土壙は第1号住居跡の床面下で検出されたことから、この住居跡よりも古い遺構である。しかし、その性格については不明である。

6．焼土遺構

方形を呈し、壁面全周が焼けていることから、火を使用した施設であることは明らかである。このような遺構は上新田遺跡（小井川:1981）や亘理町宮前遺跡(宮城県教育委員会:1975)などで検出されている。しかし、本遺構からは出土遺物もなく、年代・性格については不明である。

7．窯　跡

窯口・焼成室・煙道からなり、全体として柄鏡形を呈するものである。焼成室底面に木炭層が認められたことから炭焼窯跡の可能性が考えられる。年代については出土遺物がないため不明である。

Ⅴ．まとめ

調査結果を要約するとつぎのようになる。

1. 御堂平遺跡は名取川の支流笊川左岸の河岸段丘面とそれに続く丘陵斜面に立地している。
2. 発見された遺構は土器埋設遺構1基・竪穴住居跡4軒・礎石建物跡1棟・竪穴遺構2基・土壙12基・焼土遺構6基・窯跡1基である。
3. 精査された遺構は縄文時代中期の土器埋設遺構1基、平安時代の竪穴住居跡4軒・竪穴遺構1基・土壙1基、平安時代～中世の礎石建物跡1棟、時期不明の竪穴遺構1基・土壙4基・焼土遺構1基・窯跡1基である。
4. 河岸段丘面に土壙・焼土遺構・窯跡が、丘陵斜面東側に礎石建物跡・竪穴遺構が、丘陵斜面西側に土器埋設遺構・竪穴住居跡・竪穴遺構・土壙・焼土遺構が発見された。
5. 出土遺物には縄文土器・石器・土師器・赤焼土器・須恵器・中世陶器・釘がある。
6. 第2Ａ・Ｂ号住居跡で切り合いが認められ、土師器坏にも技法・形態の相違が認められた。
7. 礎石建物跡は仏堂と考えられる。

引用・参考文献

伊藤玄三　1978　「宮城県亘理郡の古代郡倉」『法政考古学』第2集　法政考古学会

伊藤進　1980　「名取市新宮一切経の歴史的背景」『名取市新宮寺一切経』東北歴史資料館

伊藤信雄・丹羽茂　1979　『花山寺跡』花山村教育委員会
加藤孝

猪越公子　1973　「縄文時代の住居址内埋甕について」『下総考古学』5　下総考古学研究会

今村啓爾　1983　「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究』2　雄山閣

岩淵康治・佐藤則之　1980　『三神峯遺跡発掘調査報告書』仙台市教育委員会

氏家和典　1957　「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

太田昭夫　1980　「御所内遺跡」『東北自動車遺跡調査報告書』Ⅱ　宮城県教育委員会

小倉強　1958　「高蔵寺阿弥陀堂」『宮城県文化財調査報告書（第三集）』宮城県教育委員会

加藤道男・佐藤好一　1980　「藤屋敷遺跡」『東北自動車道調査報告書』Ⅱ　宮城県教育委員会

霧ヶ丘遺跡調査　1973　『霧ヶ丘』武蔵野美術大学考古学研究会

熊谷幹男　1980　「西原遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅲ　宮城県教育委員会

小井川和夫　1981　『上新田遺跡』宮城県教育委員会

坂詰秀一　1961　「日本石器時代墳墓の類型的研究」『日本考古学研究』

佐藤好一・手塚均　1978　『天狗堂遺跡』田尻町教育委員会

佐藤甲二　1980　「沼原A遺跡」『仙台市開発関係遺跡調査報告書』1　仙台市教育委員会

佐藤洋・吉岡恭平　1981　『山口遺跡発掘調査報告書』仙台市教育委員会
篠原信彦他

佐藤洋・斎野裕彦　1982　『山口遺跡発掘調査報告書』仙台市教育委員会

志間泰治　1971　『堂田遺跡』白石市教育委員会

高橋富雄・加藤孝　1972　『宮城県黒川郡大和町宮床信楽寺調査報告書』大和町教育委員会

丹羽茂・小野寺祥一郎　1981　「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅴ　宮城県教育委員会
阿部博志

真山悟　1981　「東山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅴ　宮城県教育委員会

宮城県教育委員会　1967　『三十三間堂遺跡緊急調査（測量調査）概報』宮城県教育委員会

宮城県教育委員会　1975　『宮前遺跡』宮城県教育委員会

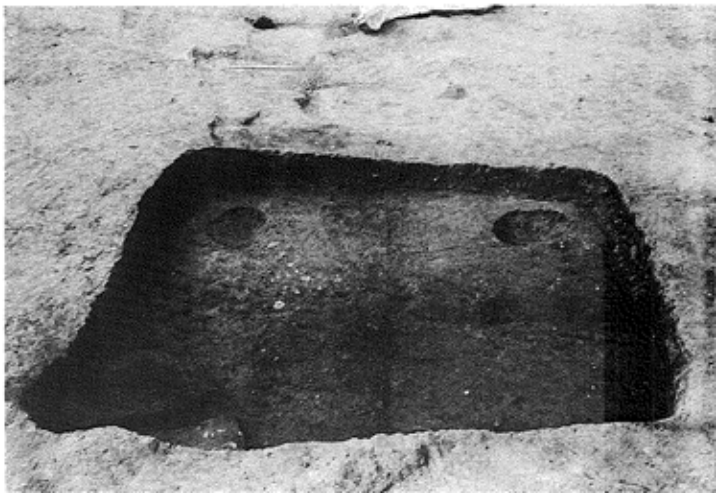
宮城県教育委員会　1978　「上深沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅰ　宮城県教育委員会

宮城県教育委員会　1977　『清田原西遺跡・船渡前遺跡』宮城県教育委員会

渡辺弘美・主浜光朗　1981　『山田上ノ台遺跡』仙台市教育委員会
柳沢みどり

遺跡の遠景

第1号住居跡

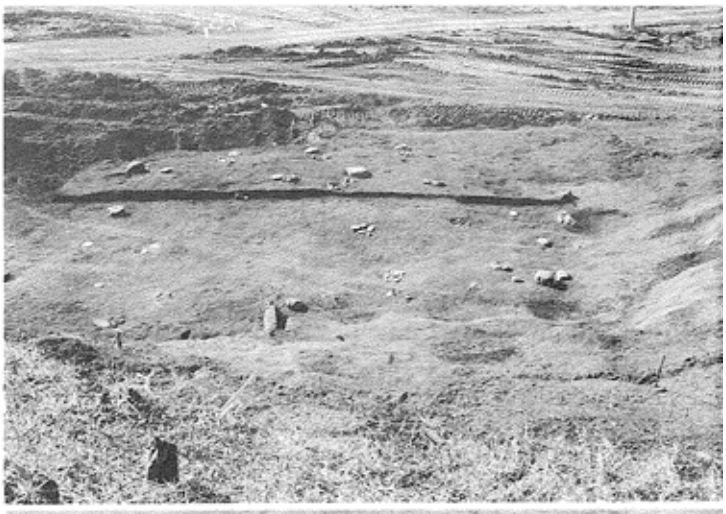


第２Ａ号住居跡

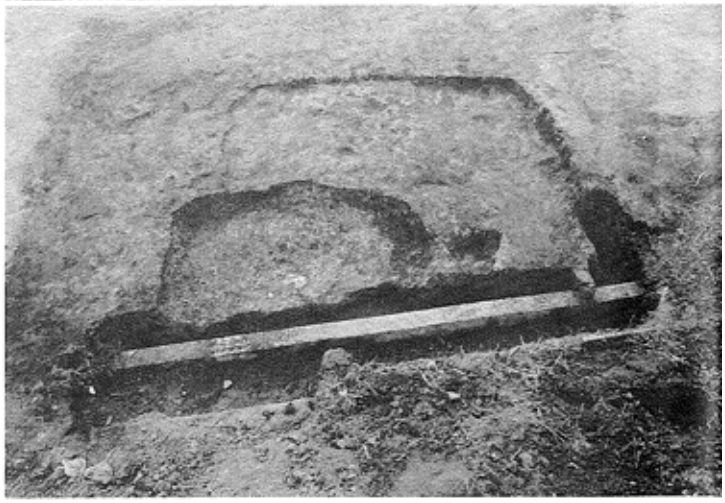
第２Ｂ号住居跡

第３（Ａ・Ｂ）号住居跡

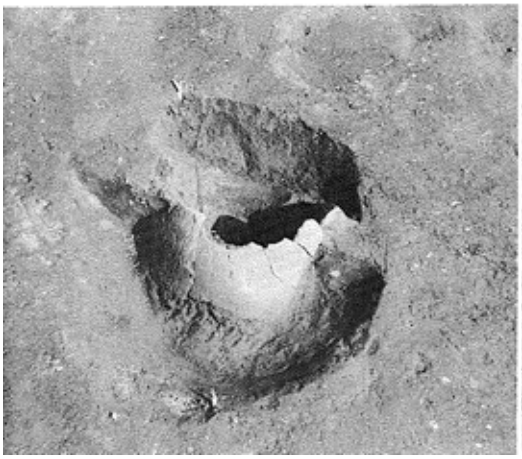
礎石建物跡



第2号竪穴遺構と
第4号土壙



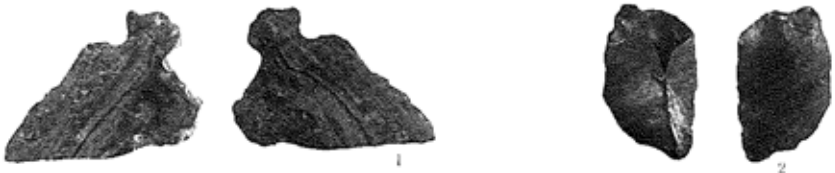
土器埋設遺構



窯　跡

1	第4図	7	第7図1
2	第5図3	8	第7図2
3	第5図1	9	第13図7
4	第5図2	10	第13図6
5	第6図3	11	第13図8
6	第6図4		

1	第13図18	7	第13図21
2	第13図22	8	第13図19
3	第13図15	9	第14図 4
4	第13図17	10	第14図 5
5	第13図23	11	第14図 6
6	第13図20	12	第14図 7



1　第21図 1
2　第21図 2
3　第21図 3
4　第21図 4